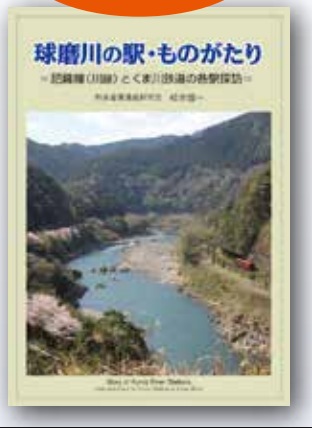
月刊くまがわ春秋 第41号 2019年8月9日発行
企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社
〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号
TEL 0966-23-3759／FAX 0966-23-3759
http://www.hitoyoshi.co.jp/ info@hitoyoshi.co.jp

球磨川の駅・ものがたり

＝肥薩線（川線）とくま川鉄道の各駅探訪＝

熊本産業遺産研究会　松本晉一

8月中旬発売開始！



懐かしい球磨川の駅をたどる

「くまがわ春秋」に連載された31駅が一冊に

■A5判 212頁オールカラー
■定価 1,620円（税込）

ご購入は人吉・球磨の書店、
発行元の人吉中央出版社、著者宛にどうぞ。

目次

球磨川の駅・各駅数値表
コラム・各駅停車
❸❶村所驛
❷❾湯前駅
❷❽新鶴羽駅
❷❼東多良木駅
❷❻多良木駅
❷❺公立病院前駅
❷❹東免田駅
❷❸あさぎり駅
❷❷おかどめ幸福駅
❷❶木上駅
❷❵一武駅
❷❰肥後西村駅
❶❾川村駅
❶❽相良藩願成寺駅
❶❼人吉温泉駅
くま川鉄道
❶❻人吉駅
❶❺西人吉駅
❶❹渡駅
❶❸那良口駅
❶❷一勝地駅
❶❶球泉洞駅
❶❿白石駅
❾吉尾駅
❽海路駅
❼瀬戸石駅
❻❺葉木駅・鎌瀬駅
❹坂本駅
❸❷八代本駅・段駅
❶❶八代駅
肥薩線（川線）
はじめに　松本晉一
推薦文　水戸岡鋭治

注文・発行元：人吉中央出版社　〒868-0015　熊本県人吉市下城本町1436－4の3号
☎0966-23-3759／FAX0966-23-3759　http://www.hitoyoshi.co.jp　Info@hitoyoshi.co.jp
著者連絡・注文先：熊本県人吉市九日町115 松本歯科医院（〒868-0004）　Fax 0966-25-1360

雑誌 81779−08-9

4910817790895
00500

定価540円　本体500円

流域の人々と歩む月刊誌

くまがわ春秋

2019 8 第41号

旧駅長官舎のホテル

8月2日にオープンした古民家ホテル「星岳・月岳」（人吉市矢岳町）© 松本 学

最近のおもな出来事

7月20日（土）
▽国指定史跡大村横穴古墳群「古墳まつり」（人吉市城本公園）
▽ヒストリアテラス五木谷特別企画展「第1回川崎のぼる原画展」（～9月29日、同テラス）
▽やまえええほんの森5周年記念おはなし会（山江村歴史民俗資料館）
7月21日（日）
▽参議院議員選挙投・開票
▽全九州百歳ソフトテニス大会（人吉市村山公園テニスコート）
7月22日（月）
▽ひとよしくまこども劇場例会「おとのわMUSIC」（山江村農村環境改善センター）
7月27日（土）
▽水上スカイ100マイル（水上村スカイビレッジ）
▽第30回リバーフェスティバル「サガラッパ祭」（相良村柳瀬河川敷）
7月28日（日）
▽特別講演会「江戸時代から現在までの八代の製紙業」（八代市立博物館未来の森ミュージアム講義室）
7月31日（水）
▽青井阿蘇神社「夏越祭」（同神社）
8月3日（土）
▽ゆうれい祭り（人吉市土手町、永国寺）

今月の一言

『**文読む月日**』（レフ・トルストイ編著　北御門二郎訳）より

人々と共にいるとき、孤独のときに学んだことを忘れぬがよい。孤独の内にあるとき、人々との交際によって学んだことを思うがよい。

表紙写真

8月2日にオープンした古民家ホテル「星岳・月岳」（人吉市矢岳町）

人吉市矢岳町のJR矢岳駅近くにある国の有形登録文化財・旧国鉄駅長官舎が古民家ホテル「星岳・月岳」に生まれ変わり、8月2日にオープンした。撮影に出かけたこの日はまだオープン前で、最終チェックに余念の無いスタッフの皆さんが、炎天下のなか作業をしていた。（関連記事3頁）　撮影／松本学（編集部）

本誌の取扱店舗　■清藤書店■ブックスミスミ■明屋書店（錦店・免田店・多良木駅店）■道の駅さかもと■ TSUTAYA 八代松江店

8月（第41号）目次

柳人があじわう漱石俳句㊶　いわさき楊子…5
くまがわの神さん仏さん㊱　宮原信晃…6
記憶の落ち穂㊵「パンくいこじき」坂本福治…9
山に行こうよ！⑳「夏木山」…16
城跡探訪記①「上土城跡」…18
「西 道庵 先生」の実像を追って㊦　那須智治…20
おっとわっとあすび㉛　松舟博満…27
建築みてある記㊱「さかもと館」　森山　学…28
漢和字典は面白い㉔　鶴上寛治…33
「あがっ段㊳「最高に嬉しい日」上杉芳野…34
「戦地の便り」に見る家族の絆①　尾方保之…36
川辺川ダム問題　書評シリーズ③　森 明香…40

巻頭企画

旧駅長宿舎がホテルに…3
モモコの「1日駅長」day…4
「還暦を過ぎて想うこと」大草知子…10
「ふるさと坂本」牧野里美…14

現代社会の基礎用語②…44
仏教を救った僧侶「黙雷」⑦　冨永和信…46
砂時計―思い出るままに⑩　小野武己…50
小説・相良清兵衛⑳　山口 啓二…54
『外来語から学ぶ英単語』を読む　上村雄一…59
外来語から学ぶ英単語㊶　藤原　宏…61
倉敷便り㉜　原田 正史…62
字図で見る球磨の地名㉛　上村重次…64
Facebook 華文俳句社⑧　永田満徳…67
方言を味わう㊱　年中行事八月　前田一洋…68
お休みどころ通信⑨　興野康也…70
いもご短歌会…72
前号【くまがわ学習塾㉛の答え】…73
坂本工場関係資料⑦　戦争と工場…74
鶺鴒短歌会…75
マイ・文庫本『戦国廃城紀行』…76
おどんがプラモコンテスト…78
人吉球磨美術連盟…78
ひろしの…げっかん・ぎひょう…78
インフォメーション…79

巻頭言

アイスクリームの天ぷら

祖父が亡くなって50年経つ。製紙工場に勤務し課長代理で退職した。赤紙（招集令状）がきて戦地にいった。戦争中は工員不足で、人員を補うため旧制中学の生徒たちが工場に「勤労奉仕」に向かい、工場の稼働を助けた。近くの駅では出征する兵士（工場労働者）を見送る送迎会が盛大に開かれた。戦死覚悟の出征であった。それで中国に向かう前日に久留米に向かい、家族そろって宴を開いたという。戦後、虱（しらみ）だらけで復員し、軍服をくりかえし熱湯で消毒したらしい。その軍服で職場に復帰した。課長代理での退職は通例であった。現地採用の労働者は課長までしか昇進できなかった。

狸を捕まえて襟巻きをつくり、川漁用の網をつくるのを日課にしていた。その祖父が「アイスクリン（アイスクリーム）を食うか」と言った。うれしい提案であった。しかし、祖父は「アイスクリンを油で挙げる」とつづけた。そういうことをしたら、アイスクリンは溶けてしまうのではないか、祖父に騙されたと悔しくなった。ずいぶんたってから、それが最高級の料理であることを知った。祖父は、「アイスクリームの天ぷら」をどこで知ったか。日奈久の有名旅館ではないかと推測している。虱だらけで復員している。戦争中の知識ではない。引き算的には件（くだん）の旅館しかない。しかし、亡くなって50年、すべては藪の中になった。

50年前、遠くに働きに出た者は盆暮れには必ず帰省していた。祖父の場合もそうであった。どの家もそうであった。その状況はいまも変わらない。道路・列車が混雑しても帰省し、実家のことを思う。両親・祖父母の元気な顔を見たい、見せたいとの素朴な感情がそうさせるのだろう。同じ時期の集団的行動である。素朴な感情を満足させる仕組みが社会的に成立していることになる。この仕組みを拡大し労働者の休み方を考えてもいい。

時代と言葉は変化する。「藪入り」は死語になった気がする。しかし、祖父たちの時代に戦争があり、その戦争であったこと、そして、ご先祖さまを大切にすることは、決して「藪の中」の話ではない。

（春秋）

旧駅長宿舎がホテルに

JR矢岳駅近くに8月2日オープン

左の建物が「月岳」、奥が「星岳」

昨年9月、人吉市大畑駅の保線詰所を改修しオープンしたフレンチレストラン「Ｌｏｏｐ」と連携した秘境オーベルジュ（宿泊施設を備えたレストラン）の宿泊棟として、矢岳町のＪＲ矢岳駅近くにある国の有形登録文化財・旧国鉄駅長官舎が古民家ホテル「星岳・月岳」に生まれ変わり、8月2日にオープンした。

同ホテルは、木造瓦ぶき平屋建ての2棟からなり、「星岳」（定員４人）は明治42年に国鉄が建てた駅長官舎で、「月岳」（定員４人）は平成13年に個人が建てたもの。

いずれも空き家となっていたが、古民家の活用に取り組む㈱ＮＯＴＥ人吉球磨（村口隆代表取締役、人吉市）が取得して改修。「Ｌｏｏｐ」とともに㈱クラシックレールウェイホテル（中島秀豊代表取締役、同市）が運営する。

和室とベッドルーム（同社資料より）

畳敷きの和室2部屋、ベッドルーム、檜風呂を備え、利用者は人吉駅でチェックインし、列車でホテルへ。夕食は「Ｌｏｏｐ」、朝食は「星岳」で提供する。

当面は「星岳」のみで営業し、金曜日からの週末とし、基本料金は1泊２人で税抜き８万円（ディナー、朝食、人吉―矢岳間の列車と大畑間のタクシー運賃込み）から。なお、８月中はすでに予約済みという。

坂本町で多彩なイベント
モモコの「1日駅長」day

本誌の「限界集落通信」などでお馴染みの坂本桃子さんが、八代市の道の駅さかもとで「1日駅長」を務めるイベントが7月24日に開かれ、平日にもかかわらず多くの人で賑わった。

食処さかもと鮎やなでは、地元の食材を使った「究極の坂本ごはん・夏」が10食限定で提供され、お昼過ぎには完売した。ほかに一夢庵風流窯の上村さんの絵付け実演や、地元の匠の手による「坂本てしごと展」、鮎をモチーフにしたチェーンソーアートの実演もあった。

このイベントを企画した桃子さんは、「ケーブルテレビを見て会いにきてくださった坂本のじいちゃんばあちゃん、私の自由なアイディアを形にして頂いた皆さんに感謝いたします。柔軟にご対応いただいた道の駅坂本さまには一番お礼を申し上げます」と語っていた。

鮎をモチーフに作られていくチェーンソーアート

10食限定の「究極の坂本ごはん・夏」

一夢庵風流窯の上村さんの絵付けの実演

完成したチェーンソーアート
（写真提供：水俣食べる通信）

柳人があじわう漱石俳句
—㊶—

いわさき楊子

―涼しさや―

ゑいやつと蝿叩きけり書生部屋
（漱石29歳）

いかにも若い元気な書生が蝿を叩く声が聞こえてきそうだ。書生部屋という死語にはいまやあこがれのような響きがある。余裕のある家は書生をおくことがよくあった。遠くから来て学ぶ学生は住み込んで師や家族の身のまわりの世話のようなこともしていた。

漱石は熊本で結婚後3軒目の大江村の家ではじめて書生をおいた。それは久留米出身の俣野義郎。縁側で撮った写真も残っている。後年の小説『吾輩は猫である』の多々良三平のモデルとされている。その後に移り住んだ家にも五高生らが書生として同居している。

秋の蠅握つて面して放したり
（漱石29歳）

蠅は本来夏の季語。「うるさい」は「五月蠅い」と表記するように迷惑な存在としている。ところが、秋になって動きの悪くなった蠅を詠むのも俳句の趣。一度は手の平でつかまえたものの放してやった、というだけの句だが、放した後の視線の動きが見える。「もう捕まるなよ」。

涼しさや大釣鐘を抱て居る
（漱石29歳）

「涼し」は、暑いときにこそ感じる繊細な夏の季語。この句の場合、「や」の切れ字はあまりにも大げさだが「大梵鐘」という象徴的な仏具だからこれでいいのかもしれない。さぞひんやりとしていたことだろう。

柳人は同じくひんやりとする金属でも、鍋や釜など卑近なものについ置きかえたくなる。

涼しさや鍋釜を抱く熱帯夜
グリーンの蠅にやさしい工叩き
金魚より涼しげなのは金魚鉢

【いわさき楊子（ようこ）／川柳と俳句の愛好家、熊本市在住】

くまがわの神さん仏さん 36

井川のお地蔵さん
―殿のお抱え石工が刻んだ石仏―

宮原信晃

日本の隠れ里といわれる人吉球磨には、不思議なお地蔵さんがいる。

花が絶えることがない井川のお地蔵さん（人吉市中神町）

それは、左の膝を立てたポーズのお地蔵さんだ。他の地域にいないとはいわないが、人吉球磨の江戸期のお地蔵なら普通に左の膝を立てたお地蔵さんが、それこそゴロゴロおられる。

人吉市内は中原小学校の下の「中神段・石坂井川」という水源横の、ほのかな笑顔のお地蔵さんもそうだ。

そのお地蔵さんの祭りと聞いたので夕方7時過ぎに押しかけてみた。

お接待に出された漬け物や煮豆

中神段の人達が石坂の広場にシートを広げてお茶やお菓子、漬け物に煮豆をふるまっておられた。お地蔵さんにお参りしてシートに座ると、まさに上げ膳据え膳、球磨焼酎まで出て来た。ご近所の方々がお地蔵さんのお祭りの日には焼酎飲みをする年中行事なのだ。

「おまや、どっかで見た気のする」と焼酎を飲みながら私に語りかけるおじさんや、「いつもありがとうございますねえ」と笑顔のお母さんたちもいる。

井川のお地蔵さんのお世話をされている中神町段地区の皆さん

お地蔵さんが見ておられる真ん前で、みんなが座っての焼酎飲みだ。

「おまや、久しゅう～見らんやったねえ～」、「おら、入院しとったったい」と近況報告が続く。

「焼酎ば、おかわり下さい」と遠慮無く言うと、さっと2杯目が出る。

あたりが暗くなってもライトが数本もシートの上の宴会を照らし出し、近くに住む市会議員さんや、まとめ役の方々を中心にいろんな話しが出て来た。

「なんで、ここのお地蔵さんは、左の膝ば立てとんなっとかな」

「それはですね、かんたんにいえば、直ぐに立ち上がって、目の前の人を救うため、と、そういった方が話が早いと思いますね」

「あすけ、こまんか字で何か書いてあったばってん、何の書いてあっとかにゃ～」

「実は、私がお地蔵さんの後ろを調べて石工さんのことがわかったので、柳瀬久さんが説明書きを作って頂いたんですよ」

「だっが作んなったとな」

「この人吉球磨は相良のお殿様のお力で栄えてきたっですが、そのお殿様の、お抱え石工さんが作んなったとです。名を松尾喜三右衛門と書きますが、喜三右衛門は『きみえもん』と読まずに『きぞうえもん』と読むそうです。三という字は、蔵の代わりに使ったそうで『み』ではたい」

人吉球磨で一番、耳が大きくなっちゃった!?

なく『ぞう』と読むのだそうです」

「おまや、よう～知っとんなあ～」

「これは、戸越の黒肥地改太郎さんの教えてやんなったです」

「おどま～しらん。改太郎さんは、元気じゃろうか～」

「お元気ですよ」

「とこいで、そのお殿様のお抱えとかいう人は、どやん人やったんな」

「お殿様のお抱えだから、松尾という名字のあっとですよね。その松尾喜三右衛門は石工の棟梁だったらしく、お城のお殿様がお住まいだった人吉城の入り口の石の橋、御館橋を明和３（１７６６）年に造り上げています。それからこのお地蔵さんを明和８（１７７１）年、そして矢黒神社の石鳥居を天明８（１７８８年）年に建立しました。

昔の石工の棟梁は、石橋・鳥居、そしてお地蔵さんを造り上げる事のできる腕前が必要だったようですよ。

ここのお地蔵さんのお姿など、なかなか他ではみる事の出来ない、名作ですよね。特に、ここのお地蔵さんの耳がでかい！　これは、特徴と思いますよ」。

誰も聞いていなかった。みんなご家族の話や友人、それに各家の近況が華やかに飛び交った。

まだ、残っている球磨焼酎のお湯割りの紙コップを手に、「みなさんお世話になりました。また来年来ます」と挨拶した。さてこれから美味しいうどんを出してくれる近くのお店で、お地蔵さんの話でもするかと、石坂を下りた。お地蔵さんが手を振って見送っておられる、そんな気もした。

お地蔵さんの近くにある「青井うどん」で、夕食をいただく

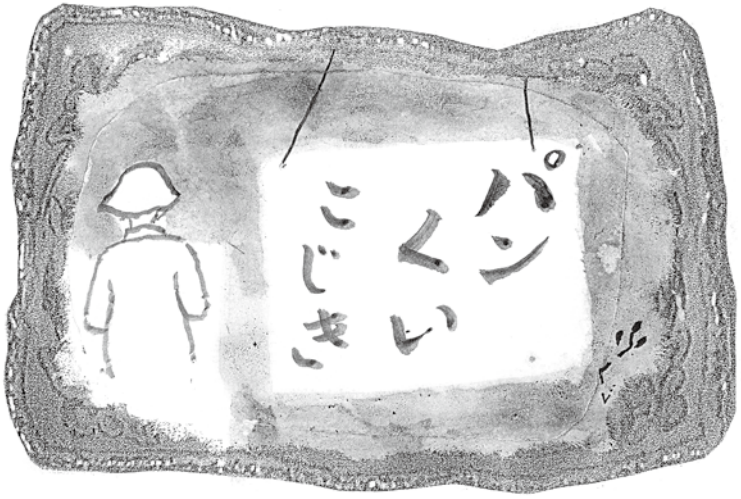
【みやはら・のぶあき／ＦＢお地蔵さん調査隊代表・人吉おおくま座の会事務局】

記憶の落ち穂

その ㊵

絵と文／坂本福治

パンくいこじき



終戦前の小学三年の時、私は平壌府庁の裏手にある山手小学校に通っていた。昼食にパンが配給され、食べずに下校した日があった。親友と肩を並べて歩きながら、ふざけてパンを口にあて、食べる真似をした。運悪く、それを佐々木という級長が見ていた。翌朝、彼は先生の前に立ち、「坂本君は道でパンを食べていました」と。私は「真似をしただけ」とは言えなかった。先生は、上質の紙に、きれいな筆字で「パンくいこじき」と書かれ、私の胸にさげられた。私の自尊心は大いに傷ついた。そのことでその時間が終わったかのように、印象深く私の記憶に残っている。

戦争が終わって、学校はなくなり、私たちは遊ぶことしかやることがなかった。カン蹴りをしたり、ビンに水とカーバイトを入れて爆発させたりしていた。すると受け持ちの先生によく似た男性の後ろ姿が遠のくのが見えた。追っかけてみたい気もしたが、あの日のことが思い出され、じっと見送った。

【さかもと・ふくじ／画家、人吉市】

私の宝物 ～還暦を過ぎて想うこと～

大草 知子

「社会人の仲間入りをした皆さんと、いつか一緒に仕事ができる日を夢見て、楽しみに待っています」。この言葉は、私が大学医学部の教員として過ごしてきた30年余りの間、卒業生にかけ続けてきた言葉です。ここ最近10年間、この楽しみに待っていたことが、現実として経験することがありました。

(1) 2010年春：研修医時代を指導したNさん

Y大学循環器内科に研修医として研修にきた彼は、どことなく私の甥っ子に似た雰囲気を持っていました。非常に素直で、口数の少ない青年。指導医の私は、生死の一刻を争う循環器医として血気盛んな時期でした。おっとりとしたNさんは、日常臨床が辛すぎたのか、いつも何か遠くを眺めているような目をしていました。当時の彼に対する私の印象も、正直なところ特に優秀で、キレるタイプではないという感じでした。研修医を終え、奥さんの実家のある関東地方に居を移したらしいという話を風の便りに聞いたのが最後。思い出すことも、話題に上ることもなく時が過ぎていきました。

約10年前、学会シンポジウムで講演を終え、参加者のみなさまと挨拶を交わしている時でした。遠くでなにか話をしたそうに立っている青年が目にとまりました。Nさんでした。彼は遠慮がちに、私を待っていたのです。彼の方を見て、私がニコッとしたとたん、彼が小走りにかけ寄ってきました。「先生、ご無沙汰しています。研修医時代にお世話になったNです。先生のご活躍は、いつも遠くから拝見しています。あの頃は、本当に厳しい、辛い毎日でしたが、先生に教わったこと、決して忘れることはありません。今になって、先生のご指導が如何に素晴らしいものだったと、身にしみてわかります。ありがとうございました。今後、先生のお役に立てることがありましたら、僕にいつでもお申し付けください」。おしゃべりをしながら、いつの間にか私の荷物を持って、私を気遣いながら歩調を合わせて歩くNさんに、胸が熱くなりました。

私の極北への旅はまだまだ続く

(2) 2015年夏：関東地方の大学卒業後、故郷のY大学循環器内科に新入局したAさん

他大学からの新入局者は、同級生もなく、先輩達に囲まれ、ストレスの多い状況にあります。私も大学卒業後は、母校以外の大学で研修医、大学院時代を過ごし、不安や心細さを痛いほど経験しました。Aさんは、東京の大学医学部を卒業し、お父さんの後継者として研鑽を積むために故郷のY大学に入局しました。新しい環境に慣れる間もなく、先輩医師の厳しい指導、愚痴を言い合える同僚もなく、不安な日々を過ごしていたようでした。その頃の私は、彼とは医学の事のみならず、日常の様々なことを機会ある毎に話していました。医局事務のお姉さん方（特にお局様）の接し方、上司とのコミュニケーションテクニック、他科医師とのつきあい方、等々、オバタリアン根性全開で話していました。医学専門知識を深く指導した記憶はありません。その後、やはり東京が恋しくなったのか、東京の病院に戻り、その後は九州地方の大学に移りました。

ある日、放浪癖のある私は、休暇を利用して一路、奄美大島を目指していました。福岡空港内で、航空機までの送迎バスに座っていると、突然「大草先生ですよね？　僕はAです。」と声をかけてくる男女がありました。「えっ～と…。どちらのAさんでしたっけ?」の言葉しか出ない私。「Y大学病院で、お世話になったAです。その節は、右も左もわからない僕に、いろいろご指導頂き、ありがとうございました。心強かったです！」「あら～っ、A先生、こんな所で出会うなんて、奇遇ね～。立派になられ、誰かわからんかった～」。「今日はお休みをもらって、嫁と奄美大島に行きます。先生は、出張ですか?」って…。「ん?…そう、ま、まあね～」とは決してごまかせない私は、「違う、違う。私もお休みをもらって、釣り、釣りよ～！　奄美大島は、大物が釣れるからね！」。「僕、もうすぐしたら故郷に戻ります。またその時は、いろいろとご指導ください。どうか先生、釣りを満喫してくださいね」。短い時間でしたが、懐かしい気持ちで会話がはずみました。最近、故郷に帰ったAさんは、どうやらどっぷりと釣りにはまっているらしい、見かねた私の釣り友達が、今度釣りに同行するらしい、という情報が入りました。「余暇の過ごし方教育」の賜でしょうか。

(3) 2019年夏：睡眠教育シンポジウムで出会ったY大学卒業生Mさん

「睡眠教育15周年記念シンポジウム」という、睡眠教育を熱心に遂行されてきた宮崎総一郎先生の記念行事が名古屋で開催されました。その教育に携わっている関係で、シンポジウムに参加、周りは○○名誉教授、○○名誉院長、○○学長、等など錚々たる先生方だらけです。場違い感満載の私は、借りてきた猫状態で、非常に緊張して席に着いていました。その時でした。名古屋市内の病院に勤務しているMさんが、名刺を持ってテーブルに挨拶に来ました。「大草先生、Y大学医学部の卒業生のMです。学生時代には、先生の講義を受けました」。「あらまあ～、そうですか！　循環器内科学の講義ですね？　厳しかったでしょ～?」。「はい、当時は難しくてチンプンカンプンでした。今となっては、ものすごい内容の講義をされていたのだな～って思います。自分は小児精神科医になっていますが、今でも先生の講義が役立っています。睡眠という共通のテーマで、今後の自分たちの研究にご協力頂ければと思います」。「領域を越えて、共通テーマで研究をすることは、素晴らしいことです。私も一緒に研究できること、楽しみにしていますね」。まさしく、世代を超えた医師として、共に社会に貢献すべく仕事をするということを実感した時でした。

実例を三例、お話し致しました。最後に、三名とも偶然に再会した場面で、自然と感謝と決意の言葉が出てきた背景を考えてみました。卒業後に過ごした彼らの年月の間には、たくさんの山坂や苦労・困難があったことと思います。しかし、その経過中、それなりに充実した時を過ごし、加えてこれからの目標を見据えているため、自然と感謝と決意の言葉が出てきた、ということではないでしょうか。

教育とは

・忍耐強く、地道に重い石垣を組むようなもの
・多岐にわたる教育は、緩みのない、しっかりとした土台を創り、その結果として、土台の上には永年にわたり、揺らぐことのない強固な建物を築くことができる
・土台創りの結果は、一朝一夕には出ない

長年教育に携わりつつ、気づけば自分の周りは沢山の宝物に囲まれていることを実感するこの頃です。さっ、夏休みも近くなりました。学生さんから吸い取ったエネルギーを基に、この夏も冒険に出かけようとニヤニヤしています！

【おおくさ・ともこ／医師、宇部市】

ふるさと坂本

牧野里美

7年前に次のノートを書いた。

※　※　※　※　※

かつての坂本町荒瀬の様子

随分昔に他界した母方の祖母は、早くに夫を亡くし、その後は魚屋さんやクリーニング店を営んだりしながら、女手一つで子供7人を育てあげた。

魚釣りが好きで、80歳を過ぎて目が遠くなっても毎日球磨川の川べりに出掛けて行き、魚釣りをしたり、釣りをしている人たちをずっと眺めていた。「いつ川に落ちるやもしれぬ」という家族の心配もよそに、他界するまでは毎日のように川に出掛けていた。

釣りとともに歌が大好きであった祖母は、自分で作詞をし、カラオケで替え歌風に歌っていた。坂本村（現八代市坂本町）と球磨川に想いを込めた詩であった。

祖母が亡くなったとき、母からこの詩を預かり、相談を持ちかけられた。「大好きだった演歌の作曲家の先生に、この詩に曲を書いてもらえないものだろうか?」と。

ぶしつけであったが、数名の作曲家に「この詩に曲を書いてもらえませんか?」とお手紙を書いた。しかし返事が来ることはなかった。

存命なら125歳。亡くなってからもう40年近くたった。以来、祖母の詩は私の手元にある。ひとりで子供7人を育てあげてきた気丈な祖母が作った歌は男気のある詩だ。この詩にやはり曲がほしい。

ふるさと坂本

詞：上羽　道枝

一：球磨の川波　男の意気地
岩にくだけて　玉と散る
岸辺に咲いた紅つばき
燃ゆる思ひの色に咲く
あゝ心豊かな　ふるさと坂本

二：四季に折々の　山川みれば
おさなき頃を　思い出す
なおさりやらぬ　思い出に
まつりだいこが胸をうつ
あゝ恋しなつかし　ふるさと坂本

三：水もゆたかな　荒瀬のダムに
ボートうかべた　若人よ
オール持つ手に波の花
春の夢かけ　花ひらく
あゝのぞみ広がる　ふるさと坂本

詩の三番にある荒瀬のダムは、今年全国で最初に撤去されることが決まったダムである。

地元の方々の熱意と運動が実を結んだ結果のものである。

荒瀬ダムの撤去は「日本で初めて」の大きなニュースでありながら、報道では大きく伝えられていない。

※　※　※　※　※

この文章を綴ってから7年。荒瀬ダムの撤去は無事完了した。

【まきの・さとみ／香川県】

現在の荒瀬の様子

［※編集部注］筆者の牧野さんは坂本製紙工場の創設者の一人・上羽勝衛の曾孫。創設者のなかで坂本に残ったのは勝衛の子孫だけである。冒頭、曾祖母の苦労が語られている。その理由は本誌でおって紹介する予定。

山に行こうよ！ その⑳

「人吉球磨ハイキングクラブ」通信より

宮崎県日之影町・大分県佐伯市 標高 1,386m 夏木山

2019年5月3～5日　天候：晴れ　参加者：6名

5月3日、2台の車に分乗し、人吉を7時半出発する。連休とあって道路が混むと思っていたが、高千穂町には11時前には到着。ゆっくり昼飯を食べようと、駐車場を探したが何処も満杯、青雲橋の道の駅へ向かうが、そこも満杯。仕方なく橋を渡って、ようやく空いたレストランで昼食。日之影宇目線に降りて見立へ向かう。

登山口から五葉岳を望む

途中、日隠林道の状況を見るため、五葉岳登山口の駐車場まで下見調査をする。林道は無舗装、木材搬出中で各所に集積場があり、山側からの排水用の溝も各所にあり、かなり悪路となっていた。駐車場まで約一時間かかり、往復2時間かかった。

一日目「河鹿荘」に宿泊する。宿は日之影川の右岸に建てられており、裏の窓から河原がよく見える。時間があったので川に下りてみたり、近くの神社にお参りしたりした。

5月4日、朝5時過ぎ起床。天気は上々、6時半出発。悪路を予想して、善昭さんの車から一人が四駆車に移ってもらい、前日下見をしていた大吹谷五葉岳登山口に7時20分ごろ到着。もう数台の車があった。7時40分、出発。檜の植林の中の急な上りを喘ぎ喘ぎ登って行くと、五葉岳の岩峰が見えてくる。この辺りも昔はスズタケに覆われていたはずだが、やぶ漕ぎもなくツクシアケボノツツジの花だけが咲いていた。

五葉岳山頂にて

五葉岳9時20分到着。遠く北の方角に傾山、祖母の連山、南の方に鹿納山トンガリの山頂…大崩山の大展望が開けていた。しばし休憩、登山者もあり写真を撮って貰ったりして、9時40分出発。夏木山分岐から、なだらかな尾根道を夏木山へ。本当に歩きやすい縦走路だ。アケボノツツジが多くなり、人が多くなったら山頂だった。11時10分到着、ここで昼食休息とした。

夏木山山頂にて

12時に出発、夏木山分岐まで緩やかな登りをひきかえす。13時30分到着。右折して兜布岳14時30分着。ここまでの稜線ではツクシアケボノは当然として、シャクナゲ・ミツバツツジ・馬酔木（アシビ）の花が満開で、それはそれは見応えがある花の群落だった。遠く霞んで祖母山、古祖母山が見えている。兜布岳から五葉岳の方に少し戻り、河鹿荘の標識がある所より駐車場まで下る。15時20分到着。

この日の宿は私達だけで一人ずつ風呂に入り、宿の主人ともゆっくり語り合うことが出来た。奥さんが亡くなって、お手伝いの人を頼んでやっていること、国有林の伐採で山が荒れ、水が家のそばまで来たことなどを知る。

5月5日、計画書では、丹助岳に登る予定にしていたが、高千穂町から近い「赤川浦岳」に変更。2日程前、小川のイオンモールの書店で見つけた「noboro」の記事のなかに、登山口から二時間登るとアケボノツツジが見られる山として紹介されていたのだ。

この山に登って見ようということで、高千穂町の方から林道を探したが、結局登山口の「黒原越」には行けず、五ケ所高原の方に廻ってやっと辿り着いたのがもう12時近い時間。今回はやめとこうということになり、昼ご飯を食べて、人吉に向けて出発した。

【徳澄正照】

城跡探訪記 ❶
上土城（あげつちじょう）跡

別　名・大牟田城
所在地・八代市千丁町大牟田字城（岩崎神社）

文亀元（１５０１）年、名和顕忠の家臣・蜂須賀家親が築城。

永世元年（１５０４年）、名和顕忠は相良長敏に敗北、宇土城に退き、名和一族の八代支配は完全に終了した。

名和一族に代わり、相良長敏が古麓城に入り、各支城に重臣を配置した。興善寺城（別名・関城）には相良伊勢守が入り居城にした。上土城には伊勢守の与力・岩崎主馬忠久が入城。主馬は永正元（１５０４）年から天文１２（１５４３）年まで在城し、その後、村山飛騨守の居城になる。興禅寺城と上土城とは、本城と支城の関係にあるが、前者が山城であるの対して後者は八代海を望む地にあって、北からの敵を夾撃する位置関係になる。当時は、天草衆の活動も活発で、それに対する警備の意味もあったのであろう。

清国正史『新相良史話　第二巻』」（熊本日日新聞情報文化センター　平成3年5月29日)278 頁の図。同書は、①関城は「岡城」のことではないか、②上土城（大牟田城）は天文 13 年 (1544 年）の危機に際して築かれたとする。その説明については別に検討しなければならないが、同書の図は当時の八代平野の姿を正確に示しているように思う。同書のいう「八代城」は「古麓城」を指す。

上土城跡（岩崎神社）。周囲には、い草が植えられている

飛騨守は、天正９（１５８１）年の響野原の戦で相良義陽とともに戦死し、以後、上土城は廃城になる。同城跡は岩崎主馬を祀る神社（岩崎神社）が創建されて、現在にいたる。「城」・「うて（大手）」の字名は残っているが、上土城の遺構は見当たらない。

岩崎神社

岩崎神社境内にある主馬の顕彰碑

岩崎主馬は千丁町のい草の始祖とされる。彼を祀る岩崎神社は別名「い草神社」という。主馬は、領民の生活を安定させるため、い草栽培を農民に奨励したという。その伝承は岩崎神社の存在から事実を伝えるものであろう。ただし主馬の経歴、い草の元種地の詳細がわかっているわけではない。農民たちは、主馬を祀るために神社を建てたのであって、その主家筋が名和、相良、嶋津、佐々、小西、加藤、細川のいずれであったかは意味がなかったであろう。

城跡にある八代市教育委員会の説明板は、主馬は「戦死」したと書いているが、どの戦いで戦死したのかについては触れていない。角田政治『肥後人名辞典』は「横死」とし、没年は不詳とする。益田敬三さんによれば、「岩崎」姓は相良には珍しく、下級武士ではないかとのこと。

地元では、永正２（１５０５）年に、い草栽培は始まったとし、主馬を「い草の神様」と呼んでいる。

（春　秋）

人吉医療センター　開院百四十周年
初代院長「西道庵（にしどうあん）先生」の実像を追って（下）

那須智治

②では西道庵の本当の姿写真は？

次の熊本日日新聞を見ていただきたい。（昭和四十二年十二月十一日掲載）

人吉市医師会理事・故権頭亮先生執筆で寄稿している。

人吉の洋医
西道庵
球磨百年の人物誌
公立病院の初代院長
名声、鹿児島まで及ぶ

当時人吉市医師会理事の故権頭亮先生によれば『球磨百年の人物誌』に載せてある西道庵の顔は下記の顔であり、人吉市医師会もこの顔を西道庵と認識している。

この肖像画は何をモデルに描かれたのか？

新聞の写真を拡大し調べてみた結果、人吉医療センターに保存されている油絵の肖像画（次頁左下）からコピーされたものだということが判明した。

故・権頭 亮先生

新聞の顔写真を詳しく調べてみれば、この顔は左の肖像画の一部のコピーであった

③本当の西道庵　姿写真

次の写真を見てください。佐無田家で保存されていたガラス乾版である

慶應三年七月に撮影された西道庵、二十一歳のガラス乾版の写真である。

佐無田家で保存されていたガラス乾版

乾版写真のケースの裏に墨書きがある

乾版のケースの裏に「慶應三丁卯年七月　二十一歳　姿寫　西道庵」の墨書きがある。

これが間違いのない二十一歳の西道庵先生の若き姿であることを確認した。

④西道庵の肖像画を見てみると

左の肖像画は、後藤松月によって戦前に描かれ、人吉医療センターに保管してある。この画のモデルは上記にあるガラス乾版の写真を手本に描いたものである。

人吉医療センター保存の西道庵肖像画
（後藤松月画）

五　昭和六十一年一月一日の人吉新聞

ここに郷土史家種元勝弘先生の次のような新聞記事がある。

種元勝弘先生はこの挿入写真に、人吉市史に記載のない写真が使ってあり、種元先生はこの写真を西 道庵と認識していたことがわかる。しかしこれは誠に不自然で、ある郷土史家にお聞きしたら「執筆者が原稿だけを送り、新聞社の方で写真を用意することがある」という話をされたことがあった。当時の編集長は故伊勢戸明氏だったので今は確認することは出来ず残念である。

西 道庵の足跡を載せた人吉新聞の記事
（昭和 61 年1月1日）

この写真の原本は左記のガラス乾版を印刷している。

（慶應三丁卯年七月　二十一歳　姿寫　西　道庵）

さらに佐無田家に保存されている次の写真を提示された。

人吉新聞の記事に掲載された写真

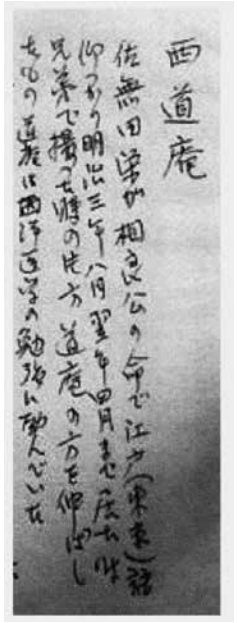
六　西道庵の生家「佐無田家に保管されている他の写真」では…

この二人の若者（ガラス乾版）が佐無田家に保管してある。誰でしょうか？

（注）西 道庵の弟・佐無田 栄が相良頼基公（相良家三十五代）の命により江戸（東京）詰め仰せつかり明治三年八月から翌年四月まで江戸に詰めた時、兄の西 道庵と兄弟で撮ったと記載が有る。

人吉市史の中ではこの写真は左の丁髷の若武者が西道庵であると記載添付されているが、実は左の人物は弟の佐無田 栄であった。

では次のⒷの写真は、Ⓐの一枚の写真を右半分に切った写真である。佐無田家のアルバムに和紙に記した注釈が貼ってある



右の写真の注釈

Ⓐ 江戸で撮られた弟・佐無田 栄（左）と 西 道庵の写真

この写真の断髪の人物が西 道庵であると佐無田實氏（佐無田 栄の実子）が記載しており、Ⓑ とⒸの写真を見比べると年齢が違うが同一人物と判断できる。

Ⓒ 慶應三丁卯年七月
21 歳　姿寫

Ⓑ 西 道庵　25 歳

七　高松家を訪問

ではいつのころから西 道庵と弟の写真が入れ替わったのか、その後の歴史書を疑問に思い、さらに確信を得る為に西 道庵の子息「東」が養子に行った高松家にお邪魔して西 道庵について伺った。

ここでも多くの貴重な資料を提供していただいた。次回機会があれば掲載する予定である。

前頁の写真Ⓐを半分に切った写真を拡大したものが人吉医療センターに保管してある。後述するが西 道庵の息子の「東」を養子に出した高松家の仏壇の上にもある。（西 道庵が嫡子東氏を医者だった高松家に養子に出し、士族の席に復帰させている）

高松家の仏壇の上の西 道庵と家族写真

人吉医療センターに保管してあり高松家の仏壇の上にも同じ写真が掲げてある。

次の2枚の写真を見比べてみる。

人吉医療センターにある肖像画の元になったのは左の写真であるが、肖像画の顔の部分を拡大してみると修正して描いてあることが分かる。

肖像画の元になった写真

肖像画の顔の部分

八　「人吉市史」以外に出版された書物や記事の中にある西 道庵の写真

①次に種元勝弘先生の『写真集　明治・大正・昭和　人吉』（昭和六十年九月二十五日発行）を見てみると、

西 道庵

佐無田郡蔵の長男。西家を継いだ。

幕末、藩費生として慶応義塾、大学南校に学び、西洋医学を研究。佐倉藩医を経て明治六年に帰国して開業。明治七年、相良淡海らの有志と私立協議病院設立、これが現在の公立人吉総合病院の前身となった

種元勝弘著『写真集　明治・大正・昭和　人吉』（左）

との写真説明があり、左下の写真が西 道庵と紹介されている。

②平成十三年二月二十六日に発行された前山光則先生監修の『人吉・球磨の１００年』に挿入の西 道庵の写真は左記のように「人吉市史」から引用してある。

③平成十九年九月二十八日に発行された『人吉・球磨の歴史』に小生が担当した西 道庵の写真は「人吉市史」から引用した『人吉・球磨の歴史』の中の西 道庵。

九　西道庵写真の考察

以上、近年出版された新聞・歴史書の中にある西 道庵の姿や挿絵、写真を比較していただいて西 道庵の写真を改めて確認していただいたと思います。

人吉市史の中の写真は、弟の佐無田 栄であることが判明しました。人吉市史を執筆された、今は亡き種元勝弘先生に直接お尋ねできれば、その真偽はわかるのですが今では推察にすぎません。何方かご存知の方がご教示くだされば真偽がわかるのですが、今は、種元勝弘先生の執筆時に誤ったと思わざるを得ません。

人吉市史の中の西 道庵の写真は間違いであることが判った以上、この写真は是正する必要があり、関係者のご尽力に期待したいところです。

十　この調査を終えて

私の未熟さから、今回誤りをここに是正することができたことで安堵している。郷土の歴史を学び記録を作るということは後世の人々に正確に伝えなければならない重責があることを肝に銘じている。先だって人吉城歴史館の学芸員の方々と話をする機会があった。「若い時、私も似たような間違いをしました」の言葉に救われたような気がした。

まだまだ人吉・球磨に多くの資料が残されており郷土史家の諸先輩が残された業績と、多くの方々が日々研鑽され古い資料を発掘されていることに敬意を表したい。私は「ああ！　なんという失敗、一生の不覚」であったと、いつも思いながら古文書に対峙している。

最後に、資料を提供していただいた佐無田家・高松家・人吉医療センターの皆さんに感謝いたします。

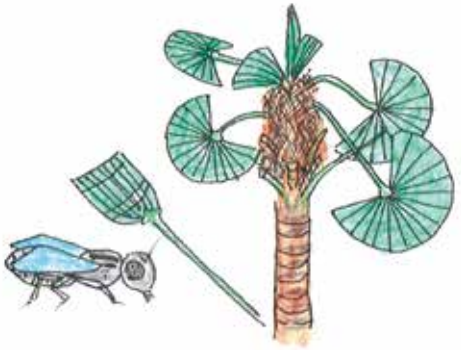
【なす・ちはる／人吉市】

【訂正】前号31頁の『人吉医師会誌』は『人吉市医師会誌』に、33頁の「人吉医師会資料」は「人吉市医師会資料」に訂正します。

おっとわっとあすび　その㉛

絵と文／松舟博満

シュロの木とひゃ



たいていん家にゃシュロの木ん植えてあって、節んぐたっとん在ってそっから長ごぅして三角か枝んぐたっとん出て、そんの先ん扇子ば広げたごとした葉のちぃとって、節から枝ん付け根ん所にゃ固とぅして一尺ぐりゃん毛のぐたっとんちぃとったで、そん毛のぐたる皮ばひゃで池ん中きゃ浸けて、鯉のイヲの卵ば産み付くっとこっば作ったりしおった。

「ひゃ叩き」

枝は三角で下ん方は丸うしとって、横ん方はギザギザしとったで削りおてぇてから、扇子んごとしとる葉ば一枚づつ引き裂ゃてから、長さば編み良かごて半分でうち切って、紡績糸で葉ば一ちょづつ絞めながら編うでいたて四段編うで、五寸ばっかりん所っでうち切って「ひゃ叩き」ん出け上がった。

どこん家でっちゃ牛馬ば飼ぅとっやいたもんで、ひゃのずびゃおって飯食う時でんおどもよま早よう飯台上つぅできとっさみゃんが茶碗の縁ぃ止まって狙るぅとった。

【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇神社・文化苑「童遊館」】

建築みてある記 ㊱

広域交流センターさかもと館 道の駅「坂本」をあるく

森山 学

写真① 国道側の全景

広域交流センターさかもと館・道の駅「坂本」（写真①）は、八代市坂本町荒瀬の球磨川左岸に面し、荒瀬ダム跡地よりやや下流に位置している。国道二二九号線沿いでもある。ＪＲ八代駅からは車で二〇分ほど。敷地内には、六月二九日に今シーズンのオープンをむかえた「さかもと鮎やな」もある。

学生と一緒に坂本町を調査した帰りなどには、ここによく立ち寄らせていただく。晩白柚ソフトクリームは学生にも大人気である。

さかもと館が建設されたのは一九九四年。この年、道の駅にも登録されている。駐車台数は大型車両五台、普通車七八台である。また二四時間トイレが別棟で、国道側に建てられている。

そのほか物産館（写真②）、レストラン、和室の大研修室などがあり、道路情報のほか、球磨川や荒瀬ダム、かつて坂本町にあった西日本製紙工場ゆかりの品など、地域に関する展示も充実している。

さてこの建物は、本誌の二〇号（二〇一七年十一月）で紹介した荒瀬ダムボートハウス（一九九五年建設）と同じ設計者、桂英昭＋ＡＩＲによって設計された。現在、くま

写真② 物産館の入口

もとアートポリスアドバイザーをつとめている桂氏は、大型の木造建築物を得意とする。

このさかもと館もやはり木造である。瓦屋根の建物が何棟も連なっているような外観が特徴的である。

それではその発想の源はどこにあったろうか。桂氏は周辺の民家を参考にしたと言う。その際の民家のイメージを、母屋のまわりの土庇に下屋がかかる形をしていて、その屋根は瓦で葺かれているもの、と解釈したらしい。たしかに建物の正面となる国道側には深く低くかかる下屋―建物は国道や駐車場よりも高台に建っているものの、それでもその瓦を見ることができる―が、お客さんを優しく迎え、軒下のコンクリート土間に影を落としている（写真③）。南西からの日差しをさえぎるのにも効果的であろう。軒は建物の全長にわ

写真③ 国道側の土庇

たり水平に伸びており、エントランス部分だけ、控え目ながら一段高くなっている。

それでは母屋の屋根はと言えば、半切妻屋根である。切妻屋根であれば屋根が三角形に見えるところであるが、半切妻では、三角形の頂部に寄棟造のように屋根がつく。さかもと館ではこの小さな寄棟造の屋根を支えるつっかえ棒が壁から飛び出している。またこの小さな寄棟造の屋根の下、つっかえ棒の背後に高窓が空けられている（写真④）。

写真④ 母屋の屋根。つっかえ棒と高窓

これを民家のかたちに置きかえれば、八代市泉町にある緒方家住宅にも見られるかぶと造りに似ている。そもそも屋根の傾斜は瓦葺きにしては急すぎる八寸勾配である。棟の上に立ちあがる天窓は、煙出しの小屋根のようにも見える。なるほど、屋根の形状は茅葺き民家からヒントを得ているのかもしれない。

この半切妻屋根の、またはかぶと造りの棟が六棟並んでいる。そのため棟と棟の間には谷ができる。実はこのつくり方も熊本県の民家に特徴的なつくり方である。県北地方にみられる二棟を並行に並べてつなげる二棟造りである。

国道側から眺めて見れば、先ほどの水平な下屋の上に六棟がにょきにょきと頭を出しているようで、その頭が際立ちつつも、お互いがゆるやかに一体感をなしている（写真⑤）。

写真⑤ 下屋の上に飛び出る母屋群

一方で球磨川側から見れば、下屋は一部にかかるのみで、六棟の独立性が強調される（写真⑥）。

写真⑥ 球磨川側（「さかもと鮎やな」建設前）

こうして見ると、この建物は全体でひとつの民家として意識されているようでもあり、また集落のようでもある。バラバラの六軒の民家が建ち並びつつ、どことなく自然発生的な調和がある。

写真⑦ 公衆トイレ越しに見るさかもと館

ちょうど、さかもと館の屋内に槌田等さんという方が描いた「坂本部落」という題名の絵が展示されている。坂本地区の集落を鳥瞰で描いたものである。まさにこの絵の中では、下屋をともなう切妻屋根や入母屋屋根の民家がバラバラと建ち並びつつ、全体としてもひとつである。まるで大きな生きもののようである。

また国道側の公衆トイレも半切妻屋根の母屋に下屋がつくかたちを踏襲しており、一棟だけで独立して建っている（写真⑦）。まるでさかもと館をつくる前に縮小版でつくった試作品のようにも見える。

ところで先ほども述べたように、この建物は木造である。鉄筋コンクリートの壁が腰のあたりまで立ち上がり、その上に木造の柱が立つ。柱と柱の間には逆正三角形をかたちづくる斜めの部材がある（写真⑧）。筋違いである。

内部では、母屋は高い吹抜けになっているが、その上部に屋根を支える小屋組を見ることができる（写真⑨）。水平な梁を支える頬杖や火打ち梁、梁の上で垂木や棟木を支える小屋筋違い、そして垂木といった斜めの部材が、木々が枝を張るようにも見える風景である。棟木を支える垂直な部材、小屋束がないのは、そうした演出を意図したものかもしれない。

小さな寄棟造の屋根を支えるつっかえ棒は、実はこの小屋筋違いが屋外に飛び出したものであった。

さてこのさかもと館から見えていたかつての荒瀬ダムは今はもうなく、球磨川の流れのなかにその痕跡だけを望むことができる。

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】

写真⑧ 筋違いがつくる逆正三角形

写真⑨ 小屋組。下は大研修室入口

漢和字典は面白い

24

鶴上寛治

影

〈かげ〉だが、陰・陰・翳など、いろいろな漢字があって難しい。影響と他にもエイキョウを与えている。〈かげ〉の漢字をどう使い分けるか。①平仮名で書く、②漢和辞典をひろげる。

字典を引いていると限りがなくなる。断然「かな書き」が正解。読み手の方で自分流に受け取って、喜んだり、泣いたり、怒ったりしてくれる。こちらの言いたいことと少しはズレていても、それで世の中がひっくり返るほどのことにはならないので心配無用。

当

本字は「當」、意味は〈あたる〉。良く（宝くじ・選挙）も、悪く（食中毒）もである。その中間もある。「当時」という言葉では、価値の上下は問題にしていない。「當」の字を分解すると《田＋尚》で、〈田間に実りを願って事にあたる〉という意味。そこから〈向き合う・つりあう・あたいする・適合する・的中する・つきあたる・出会う・引きうける・割り当てる・問題になっている（当地・当座）〉などだ。実に幅広い使い方をされている。

底

音はテイで、訓読みは〈そこ〉。英語では〝base〟なので base ball を底球と訳していた。そこに tennis が到来。これを「庭球」と訳したため、それと混同しないように「野球」と改めた。限りなく広がる野原で―外野を越えた打球はどこまでも転がる。打者がダイヤモンドを2周すれば2点、3周すれば3点―まさか？　しかし雰囲気を良く表した名訳。いまは「屋根球」か？　あれとか人工芝生などは選手の健康にとってどうなのか？　球団・リーグ・親会社・情報関係者の利益のためなのか？

【つるかみ・かんじ／人吉市】

上杉芳野の「あがっ段」㊳

最高に嬉しい日

娘二人と主人とテレビキャスター「かめきち」さんと記念撮影

　令和元年7月14日の午後12時30分より、あさぎり町須恵文化ホールにて「東日本（第9回目）・熊本大震災（第4回目）の復興支援チャリティーショー」が開催された。前日からの大雨の影響で、このチャリティーショーが開催されるかが心配され、前日から当日にかけてひっきりなしに問い合わせの電話が殺到した。殺到したのはそればかりでなく、「前売り券はありませんか?」の電話もひっきりなし。前売り券は予約注文が多く、発売して一ヶ月もしない内に完売したのである。

　何とありがたいことだろう。ありがたいと思うのは、こればかりではなかった。

　神さまが取って付けてくれたような出来事が次から次に起こったのである。

　先ず最初に、私が中学校を卒業して集団就職列車に乗って就職した先の、滋賀県の旭化成の上司であった方がこの会場に、私の娘・望と一緒に見に来て下さったのだ。その上司のお名前は稲田喜代司さん。旭化成の定年後に滋賀県の県会議員を三期も務められたお方。

　私が「関西しらがね会」や「京都くまもと県人会」に行った時に、娘と二人で滋賀県に足を運び、昔の仲間を集めて頂いた方でもある。私にとって尊敬する恩師でもあり、家族ぐるみのお付き合いをさせてもらっている方だ。

チャリティーショーの最後にお礼のあいさつをする私。滋賀県の上司、八代の母のいとこも紹介

　次に起こった出来事は、八代在住の母の従姉妹に当たる90歳のヨシノさんと、私の姉・美恵子も見に来てくれることとなった。それも祖母の分家の子供・石本博之さんが連れて来て下さる事となり、他にも八代から車5台ほどで友人たちを連れて来て下さったのだ。

　又、私の娘・夢都美もバンド仲間と初めて出演し、歌ってくれた。

　その後、又、また大変な事が舞い込んで来たのだ。

　RKK熊本放送のテレビ番組「週刊山崎くん」の取材が来たのである。何もかもがそろった後に、降って湧いたような出来事だ。

　私は思った。「これは神様が仕組んで下さった事だ」と。

　ありがたい、ありがたい。

　こんな事があるなんて、これこそお金では買えない「幸せ」というものだろうか。今回のチャリティーショーも賑わった、賑わった。

　前田一洋先生が初めの挨拶で会場の皆さんと一緒に「乾杯はお酒の歌で」を披露。

　小中学生の勇ましい太鼓を始め、小学5年生の久保田昭真君の天使の歌声。各種団体の踊り、ダンス、歌に太極拳やフラダンス、そして南稜高校のジャズダンスなど23の出し物。最後が熊本から友情出演でお越し頂いた少女舞踊団「ザ・わらべ」、子ども舞踊団「こわらべ」の皆さんの舞踊。もう会場の皆さんが舞台の子どもたちに釘付けになった、あっという間の4時間半。この大雨の中でも来て頂き最後まで見て下さった皆様方、そしてテレビ局の方々、芳野と愉快な仲間達のスタッフのみなさん、全ての人達に言いようのない感謝である。

　7月24日午後7時の週刊山崎くん。どんな形で放映されるのか楽しみである。やせて映りますように。

【うえすぎ・よしの／ボランティア観光バスガール、あさぎり町上】

「戦地（種子島）の便り」に見る家族の絆①

尾方保之

はじめに

戦争が終わって今年で七十四年を迎えた。戦争の体験者は国民の一割程となり、全く戦争が忘れさられ、遠い過去のものとなってしまおうとしている。

第二次大戦の約三百十万人の尊い犠牲のもとに誕生した平和憲法も、安倍政権のもとで九条改正が選挙の公約となった。

過去の戦争とは何であったのか、終戦記念日を機会に考えなおす必要があるのではないだろうか。

私自身、戦争が終わった昭和二十年は、小学二年生だった。戦争について知らないことばかりである。出征した父と残された家族は、戦争をどのように捉え、どう対応したのだろうか。私は父が残した「戦地の便り」をじっくり読み直し、調べて見ることにした。

私の父（尾方保）は二度従軍している。一度目は、「日中戦争」で一九三八（昭13）年六月から翌年十月まで、約一年半従軍した。そして二度目は「太平洋戦争」で、一九四四（昭19）年七月から翌年の終戦までの約一年三ヵ月従軍した。出征地が鹿児島県の種子島だったため、戦死することもなく無事生還することができた。

父は従軍中、戦地の様子や家族への思いを手紙やハガキに書き、こまめに送っていた。そして、それらの手紙やハガキの大部分を「戦地の便り」として大切に保管していたのである。（「日中戦争」のときの便りは、十六年前「週刊ひとよし」に紹介した）

そこで今回は、「太平洋戦争」における「種子島からの便り」（手紙が60通、ハガキ30通）の一部を紹介したいと思う。

㈠ 日中戦争の時の便り（手紙 51 通・ハガキ 15 通）
㈡ 太平洋戦争の時の便り（手紙 60 通・ハガキ 30 通）

種子島から送った父の手紙

父の出征

父（当時46歳、須恵青年学校校長）に二度目の召集令状が来たのは、開戦四年目の一九四四（昭和19）年七月二十三日、午後三時のことだった。この日は母の生家・高田家の田植えの加勢に行っており、令状を手にした父は、すぐに帰宅し、準備にとりかかった。翌日は朝から親戚や隣り近所の人たちが駆けつけ、送別会の準備が始まった。夜は三味線入り唄おどりの送別会となり、配給制のもとでの焼酎六升（30円）と家のニワトリ三羽、それに豆腐の料理で、来客を接待したという。

そして七月二十五日、多くの親戚や村人、生徒たちに送られ、免田駅から鹿児島へ向かったのだった。当時はとても厳しい戦況下で、六月にサイパン島が陥落し、米軍が本土に迫りつつあった。七月十八日には東条内閣が総辞職し、小磯内閣が成立していた。

鹿児島に一泊した父は、すぐ種子島兵団に派遣されることになり、種子島に向かった。

父の手紙

八月二日に種子島の西之表（にしのおもて）から送った最初の手紙が、八月六日、我が家に到着した。（旧かなつかい旧漢字は、新かなつかい新漢字で書く）

無事入隊して任地に着いた。
安心して下さい。
私の事については決して心配いりません。
よく子供を教育し、家を守って下さい。
当分、此の所宛に手紙を下さいませ。

鹿児島県熊毛郡南種子村上中
尾方　保

シマエ
どの
ルリ

母（しまえ）は四十三歳、父が出征したため、女手一つで七人の子供の世話をしなければならなくなった。姉・るり子（21歳）は長女で、二年前から皆越国民学校の助教員となり、自宅から通勤しているため、母の何よりの相談相手であった。父は自分の出征後の家族の家計のことを特に心配していたようで、すぐ次のような手紙を送っている。

父の手紙

金百五十円を送ったので届きましたら返事を下さい。
今日、又二百円送りますから、受け取ったら返事ください。この二百円は、出征手当金として将校（当時陸軍中尉、その後大尉）に渡りました。私の月給は、毎月全部合計して（給料・臨時手当・家族手当）百五十二円ですから、その中をうんと節約して百五十円は是非送る考えです。

啓保（長男17歳、病弱で父の出征後、熊本の病院へ入院）の入院費だけでも大した金が入るので、さぞかし心配のことと思います。金の不足の時は貯金をおろして下さい。…（略）（母にいろいろ書いたあとは子供たちに次のように書いている）

みんな元気で仲よくくらしていますか。病気せぬよう、火の用心をして戸じまりに注意し、兄弟げんくわをせぬこと。

西瓜がそろ〳〵うれることでしょう。

当地は柿も栗もありません。十月頃の気候です。涼しくて毎日風が強いです。…（略）

啓保（けいほ）（入院中）の病気は如何ですか。

和保（かずほ）（次男・高等科二年）本年で高等科の終わりだからうんと勉強せよ。おまえがさした甘藷（かんしょ）がさかえたろう。

国保（くにほ）（三男・六年生）足はよくなったか。うんと勉強して中学校に一番で入学するようにね。

保子（やすこ）（次女・三年生）しっかり勉強しなさい。学校から帰ったら、紘をよく遊ばしてね。

保之（やすゆき）（四男・一年生）よく勉強していますか。水あび、魚取りであぶない所へ行かぬように。

紘（ひろし）（五男・二歳）が大元気だろう。島の子供の泣声をきくとすぐ思い出します。私が出立の日、私からはなれなかった。柳をもって兵隊さんに行こいとかけ廻ったすがたが、目の前にちらつきます。…

みんな仲よく母さん、ルリさんの命をよく守って、家中、笑って日送りすること、出征将校の家庭として村の手本になるようにして下さいね。

八月六日　父より

父の願いは子供たちがしっかり勉強して、いい成績を修めること、そして村の手本となる家庭を築くことにあることがわかる。

【おがた・やすゆき／球磨郡錦町】

川辺川ダム問題を取り上げた本　書評シリーズ❸

『川辺川ダムはいらん！―住民が考えた球磨川流域の治水対策―』

川辺川ダム問題ブックレット編集委員会（２００５、花伝社）

高知大学 助教　森　明香

本誌39号で清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会（手渡す会）による第７回「川に学ぶ」研究会を紹介した。２０１５年から始まるこの研究会に連なるそもそもの発端は、川辺川ダム計画をめぐる反対運動の中で直面した出来事にあった。それは、２００１年12月から２００３年12月まで９回にわたって行われた「川辺川ダムを考える住民討論集会」（以下、住民討論集会）である。今回の書評シリーズでは、「川に学ぶ」研究会に至るまでの、市民による学習の軌跡を伝えてくれる文献を紹介したい。

住民討論集会は、２００１年の情勢を重く受け止めた潮谷義子知事（当時）によって開催に至った、後にも先にもない先進的な市民参加実践である。

２００１年当時、川辺川ダム計画をめぐる利水訴訟では、地裁で原告敗訴となった後に原告の約９割が舞台を福岡高裁に移して「ダムの水はいらん」と闘っていた。一方球磨川漁協では、ダム建設に伴う漁業補償をめぐって激しい攻防が展開されていた。２月28日総代会で漁業補償受け入れを否決、そして11月28日の臨時総代会でも13時間の持久戦ののちに翌日未明に否決となった。また、２度目の漁業補償案否決に先駆けて11月５日には、民間団体「川辺川研究会」から安価で有効な川辺川ダム治水代替案が発表された。12月３日の記者会見で国交省九州地方整備局の工藤啓河川調査官（当時）らは、八代市に限ればダムに代わる治水案があることを認めた。２００１年は、こうした動きの他にも、八代海沿岸37漁協により総決起集会が行われ、県議会による八代海への環境調査を求める意見書が出された。旧坂本村や人吉市でダムの賛否を問う住民投票条例制定を求める署名運動が展開されるなど、県内各地で県民からダム本体着工への疑問を呈する動きが繰り広げられていた。

こうしたことを受け、潮谷知事は「住民の生命、財産を守るために、国が事業主体としてダムは最善という信念を再度、住民に分かりやすく説明する責務が出てきている」と判断。「県民への説明責任を果たしてもらうためには、小規模の会合ではなく、大集会を」と促した（熊日２００１年12月３日夕刊）。国交省はこの間にもダム流域市町村長を直接訪問、建設の意向を確認し知事に対して流域首長から早期着工を働きかけるようと言って回っていた。だが、県民一人ひとりに向き合おうとしない国によるこうした姿勢は、却って潮谷知事を刺激した。国も出席した大規模討論集会で、賛否両論を闘わせることを通じて県民に対する説明責任を果たさせる。前代未聞の住民討論集会は、こうして始まった。

住民討論集会では、２００１年12月９日から２００３年12月14日まで延べ９回にわたり、ダム事業に意見のある市民や団体、専門家らが集い、国交省や事業推進派の学者との喧々諤々の議論が展開された。第１回から５回は「治水」、第６回から８回は「環境」、第９回はその双方がテーマとなった。治水をめぐっては「森林保水力の共同検証」もなされ、住民討論集会への延べ参加人数は１万２５８０人に上った（熊本日日新聞社取材班２０１０『「脱ダム」のゆくえ』）。

住民討論集会は概ね、双方の立場それぞれが推薦する専門家による討論と、登壇する各専門家に対する双方の立場からの質問、さらに一般傍聴者からの質疑、といった構成で進められた。国交省の技術職員や学者と討論するため、反対派には様々な住民団体や個人が関わることになっていく。本書の主題である「治水」をめぐりダム反対側が結成した「治水班」には、手渡す会をはじめ水害常習地に住まう人びとや中下流域や県内外の市民、土木工学者や実務家、環境生態学者などの協力者の姿があった。

国交省が主張するダム建設の根拠は、市民とは馴染みの薄い専門的な概念で説明される。とりわけ第２回住民討論集会以降、議論の争点となった「基本高水流量」はその典型であっ

た。非公開を含むデータに基づき算出される「基本高水流量」はダムで防ぐための洪水量を示す。この数値を成り立たせる発想や現実認識を質すべく、数値の算出法やその妥当性、過去に起きた洪水と河道や当時の山の状況、それらを踏まえての現実との整合性について、治水班は限られた資料を通じて学習を重ねざるを得なかった。メールを交わし時には合宿をして、川辺川ダム計画を成り立たせる〝科学〟が流域に住まう生活者の実感に見合うものであるか、学習を通して検証を続けていた。本書は、そうして練り上げられた「治水班」の住民討論集会で展開した主張を、1冊にまとめあげたものである。

本書を概観しておこう。冒頭で、川を破壊せず財政を逼迫させずダム放流の危険性もなくなる代替案があること、利水訴訟での原告勝訴（２００３年）や水没する発電所とダムによる発電量が同等といった基本情報を押さえた上で、続く2章以降、治水に特化した話題が展開されていく。

２章では「治水問題Ｑ＆Ａ」として、住民討論集会で国交省が主張した川辺川ダムの正当性に対して14の疑問を提起し、学習を通じて明らかにした事柄を根拠として反論した。たとえば、昭和38年（１９６３）以降の球磨川豪雨による死者54名を、扇千景国交大臣（当時）は「川辺川ダムがあれば救えた」と２００１年3月の国会で答弁した。だが実際には、53名が土砂災害や別の水系の犠牲者だったことを指摘する。また、国交省は「川辺川ダムがなければ八代市萩原堤防で20年に1度、人吉市内の堤防で5年に1度の割合で決壊する」と主張していたが、流域ではそうしたことは生じていない。むしろ、ダム放流や堆砂の問題や、川辺川ダムサイトが地滑りを引き起こしやすい地質構造であることを指摘し、ダム治水の正当性が破綻していることを窺わせる。

その上で3章では、「住民が考えた球磨川流域の総合治水対策」を提案する。球磨川水系を八代地区・人吉地区・球磨村や芦北町や坂本村などの中流域・相良村や錦町などの上流域・五木村の5つに区分し、ダム計画発表後になされた川幅拡幅といった河川改修に触れた上で、堤防の強化、川の中やダムに堆積した土砂の撤去、ダム事業のため未着手となっている地区の河川改修促進、洪水時の被災農地への補償制度や上流域の山林対策によって、過去最大規模の洪水（昭和57年＝１９８２）であっても十分な安全が確保できる、とした。

さらに4章では、川辺川ダムにおける基本高水流量の問題点を突いている。川辺川ダムでは、昭和2年（１９２７）から40年（１９６５）までのデータのみを用いていることにくわえ、あまり使われない「単位図法」という方法で算出された基本高水流量を採用している。改良された算出手法を用いず最新のデータを追加することもなく、従来の基本高水流量に固執する国交省に対し、「治水班」では１９５３年以降から２００５年までの約50年間のデータと上流の森林の状況を鑑みて算出した。すると、国交省がその正当性を訴える流量とは数値に大きな差が生じる。くわえて、「2日間４４０㎜雨量で人吉地点７０００t/秒の洪水が生じる」とする国交省の計画と似た状況が、１９９５年に流域を襲ったことがあった。しかし実績は、４４７㎜雨量で人吉地点３９００t/秒に過ぎなかったという。このように実績とも異なっていることも指摘した上で、ダム治水を正当化させる科学的根拠が見当たらないと断じた。

最後の5章では、多目的ダムによる川と流域社会が被る弊害、その教訓として海外で生じている脱ダムの潮流に触れた上で、持続可能で流域社会の文化や豊かな生態系を育む清流を次世代に手渡すことができる治水をこそ追求すべき、という提言で結んでいる。

ダムを最善とする事業主体の国に対し、公衆の面前で疑問を呈し討論する場であった住民討論集会は、生活実感としてダムの弊害を理解していた人びとを学習に駆り立てた。市民が練り上げた論を国交省に直接ぶつけることができた点で、住民討論集会は後にも先にもない試みであり、優れていたと思う。マスメディアでは「平行線」と評され続けたが、川の恵みを享受し暮らし続けてきたがゆえにダム反対を唱える市民にとって、住民討論集会は具体的なデータで裏付けながら事業主体に対抗可能な言説を獲得していく契機となり、やがて生活実感を理論化することへと人びとを促した。それは、ダムや連続堤防に代表される近代治水技術の思想と、川の傍に代々住み続けてきたからこそ培われた川と共生するための生活知との間には大きなギャップがあることを実感し、そのギャップがどういうものか、他者にも伝わるよう〝土地の文化〟を言語化していくプロセスでもあった。そうした意味で、本書は「川に学ぶ」研究会に至る、過渡期の記録である。

本書が編まれた後も、手渡す会をはじめ洪水や濁水のフィールド調査と学習とを重ね、川の傍に住み続けるための流域住民による実践的な理論は進化を続けていく。そのことを窺わせる冊子を、次回改めて紹介したい。

【もり・さやか／高知市】

現代社会の基礎用語 ②

4、樹木伐取権

国有林野法の定める「権利」。農林大臣が「樹木採取区」に指定した国有林について伐採業者を公募し、そのなかから伐採業者を指定し、その者に国有林を伐採する資格を与える。その資格を「樹木伐採権」という。「伐採権」は妨害排除権などを有する物権的権利と説明されている。存続期間は最大で50年。

もともと自己所有樹木の採取（伐採・取得）は自由である。しかし国有林はそうではない。第三者の林野も同様である。それにもかかわらず、同法は「樹木伐取権」を新設した。

その背景には、木材価格の低下にともない「放置樹木」の増加があるとされる。国は、それに対応するため、経営管理が不十分な林野については、一定の林業経営者に（森林組合・素材生産業者・自伐林家）に伐採作業を集約する措置をとった（森林経営管理法）。林業経営に適した森林とそうでない森林があるが、前者は民間業者に採取権は与え、後者は市町村の森林経営事業（間伐採等）とした。

しかしながら、民有林を対象にするだけでは、林業者の経営的安定を確保できない、長期的・安定的に樹木を林業経営者に供給する必要があるとし、国有林も民間業者の伐採対象にした（改定、国有林法）。民有林からの木材供給を圧迫しないため、木材利用業者（川中事業者）、木材製品利用業者（川下事業者）の連携を図るとし、そのための一定の措置を設定した。併せて。「木材の安定供給の確保に関する特別措置法」などの法律も改定した。いずれの法律も来年４月１日施行。

政府は、これらの施策を通じて、林業の「成長産業化」を図るという。これに対して乱伐の発生、盗伐の誘発、中小木材業者の淘汰、山林の水源涵養機能の衰退、生態系の変化を危惧する意見がある。大量伐採は供給過剰につながり長期的には林業の衰退をもたらすとの意見も強い。政治的には、「アベノミクスの経済成長戦略」のひとつとして政府はこれを位置づけている。

ついでながら制度設計にあたり、鹿の急増を意識した形跡がみられない。立木を伐採し、植林すれば、林業は好転すると単純に考えている節がある。完伐は下草を生み出す可能性をもたらす。植林も適切に間伐していけば有価値の山林になるようにみえる。しかし、現実には、下草も、植林用の苗も成長する前に鹿が食いつくし裸地になっている。

5、地方交付税

地方自治体間の財源の偏在を国が調整する財政制度。地方自治体の税収入は、当該地域の地理的、経済的、社会的環境によって、大きく偏在している。これを是正し、税収の不均衡や過不足を調整し、均衡を図ることに目的があるが、地方自治体の「固有の税」であって「国から与えられる補助金」ではない。平成17年2月15日の衆議院本会議で、小泉首相は「地方交付税は、国税五税の一定割合が地方団体に法律上当然に帰属するという意味において、地方の固有財源である」と答弁している。当時の小泉首相のいう「五税」は、所得税・法人税・酒税・消費税・タバコ税を指す。この点、誤解している人もいて、「国とのパイプ」が大きければ支給される交付税の金額も大きくなるという説明をみかける。しかし支給基準は法律で定められているのであって、国が裁量で支給額を決定しているわけではない。使徒も限定されていない。つまり、地方自治体の一般財源である。地方交付税は普通交付税と特別交付税の２種類がある。交付総額の94パーセントが普通交付税である（地方交付税法６条の２）。

地方交付税支給の計算方法は複雑であるので省略するが、税収見込と実際の税収のちがいなどのため、見込み額と現実に支給される交付税は一致しない。見込み額を確定額と誤解し政策立案を急ぐことにはリスクがともなう。地方交付税は政府の財政状況によって変動することを忘れるべきではない。平成30年度の普通交付税の見込額と支給額と現実の支給額を以下、表で示す。（春秋）

平成30年度の普通交付税の見込額と支給額（単位千円）

	八代市	人吉市	錦町	多良木町	あさぎり町	湯前町	水上村	相良村	五木村	山江村	球磨村
見込額	14,692,263	4,264,012	1,693,230	2,794,051	4,580,279	1,446,877	1,373,377	1,574,429	1,014,089	1,492,143	1,804,945
支給額	14,078,898	4,127,458	1,664,941	2,692,135	4,486,460	1,434,149	1,333,218	1,529,053	924,216	1,465,501	1,757,047
パーセント	96%	97%	98%	96%	98%	99%	97%	97%	91%	98%	97%
差額	613,365	136,554	28,289	101,916	93,819	12,728	40,159	45,376	89,873	26,642	47,898

もう一つの〝明治維新〟

――壊滅寸前の仏教を救った僧侶「黙雷」⑦

冨永和信

なぜ、みちのく願教寺を選んだのか

黙雷師の盛岡・願教寺住職就任については前稿で記した。師は、自身の生涯の目的の達成のための活動の場として願教寺を選び、妻子を伴い赴任した。

私（筆者）は、本山法主に次ぐ高僧・勧学長までなった師がなぜ宗務場所として願教寺を選んだのかと、極めて俗世間的な疑問を持った。黙雷師と願教寺との密接な関係が見当たらなかったからである。

そこで黙雷師夫妻の墓もある願教寺に墓参を兼ねて訪問、現住職の島地興霖師にお目にかかり、貴重な話を拝聴することが出来た。興村師は、二十五世住職黙雷師の養嗣子である大等師（二十六世住職）の孫娘の夫（つまり養子）である。

同住職においても黙雷師が岩手盛岡を選んだ経緯は資料不足で詳細は不明であるという。前住職から伝え聞いた話では、私の憶測と概ね同様であった。

つまり黙雷師生涯の持論であった布教実践のため、浄土真宗が広まっていない未開地であった当地に身を据え、東北地方の拠点、終生の活動の場と考えたのではないか。

もう一つの理由は、当時本山・本願寺は門主を巻き込んだ内部確執が起きており、そのあおりを喰ったのではないかと言われている。

黙雷の来盛が自らの意志であったのか、前述の理由による他動的な原因によるものか、その事実は不明であるとの、現住職の言葉であった。

いずれにして黙雷師は当地・当寺を布教実践の拠点として選び、終焉の地となったのである。今はただ願教寺境内の一角にある本墓に、終生の理解者であり支援者であった八千代夫人と並んで、共に永遠の眠りについている。

ちなみに墓碑銘は生涯の盟友周防徳山の徳応寺住職・赤松蓮城の筆による。

黙雷師の近親者たち

同師は養子に行った現在の山口市徳地・妙誓寺でコズエと結婚、長男・俊雄をもうける。そして同寺十六世住職となるが、前稿で記したように国事宗務に奔走し、妻子と離別。その妻子を宇部・善福寺に託し、後顧の憂い無くして仏教再興を志す同士と上洛する。

晩年の島地黙雷（菅田智哉著『慈光山専照寺と島地黙雷上人』より）

明治維新という仏教受難の風雲急を告げる時に、私事にかまっていられないとの〝大義〟に、若き僧の情熱がかような行動に走らせたのであろう。

とは言え黙雷は、自坊のみならず妻子との離別に至っては自責の念にかられ、断腸の思いだった筈である。そのことは、長男・俊雄は長じて父・黙雷の世話のもとに、本山・本願寺に修学、立派に成長して宇部・善福寺の住職となり、名字も「島地」姓を継いでいる。この事実からも、黙雷は別れた妻子を決して忘れてはいなかったことを窺うことができる。

黙雷師は、明治七（一八七四）年、周防三田尻（現防府市）の名刹・明覚寺の娘・八千代と二度目の結婚をした。二人の間には二男・黙爾を頭に雷夢、操子・篤子・百合子・威雄・輝磨と七人の子がいる。八千代夫人は賢夫人で、黙雷の良き理解者であり伴侶として終生師を支えた。

二男・黙爾は、本山・本願寺で修学して、黙雷の生家である周防・専照寺住職月諦（黙雷の実兄）の養子となり、実家寺を継ぐ。黙爾は本願寺門主にその将来を嘱望され、インド仏跡調査団の一員に選出されるほどの優れた学僧であった

が、インド留学中に二十九歳の若さで客死した。

三男・雷夢は才気に溢れた青年で、黙雷師は自分の後継者として大いに期待していた。しかし雷夢は、仏道修行に向かず旧制二高（現・東北大学）に進学、文系勉学の道を選ぶ。二高在学中に周囲の西欧先進国の思想や哲学、宗教などに秀でた教師や同僚たちの影響を受けて大きく成長した。しかしその結果、雷夢はこともあろうにキリスト教に入信するのである。その後、神戸の旧制中学の教師となるも大正四（一九一五）年、享年三十九歳にて急逝した。

仏教を代表すると評されてきた黙雷師にとって青天の霹靂（へきれき）、受け入れがたい事実であった。黙雷師にとって人生最大の悲しみではなかったろうか。

雷夢の入信の際、父に送った手紙がある。

「（前略）…父上よ不心得の子といかり給ふといかばかりの心苦しさをもって此の不心得とのお言葉を忍ぶべきやを察し給え。さもあらばあれ翻（ひるがえ）って思へば生が仏教の家に生まれたるは神、我をして殊に為すところあらんがための我例に由りて未（いま）だ仏者に於いて確固たる安心を得ず…（中略）…いつか父上母上御胸に改めて諸共にキリストのひかりを仰ぐ時あるべしと信ずれば、今一時の不幸は将来の永遠の孝と思われて却り奮躍の思い増し申し候。…（後略）」

この信書を読んだ黙雷師の心中は、如何ばかりであったろうか。私（筆者）は師の心情を如実に表現する術を知らない。

只、雷夢は己の立場をよく理解したうえでの、悩み抜いた末の決断であったであろうことは文面から察することが出来る。確信は無いが雷夢は「今の不幸は将来の孝行になる…」と書いていることから、キリスト教と仏教は将来において融合することが出来るという強い想い（夢）を描いていたのではないだろうか。

後継者の目途が立たなくなった黙雷師は、苦労して築いた願教寺の跡目を育てる必要に迫られた。そこで自分が面倒を見て、本山の大学林で修学した姫山大等（新潟県勝念寺出生）を次女篤子の婿養子に、すなわち後継者として迎えた。

大等は大学林で二男・黙爾と首席を競う俊才で、二十二世門主大谷光端のインド仏跡調査団の主要メンバーに選ばれたほどである。

雷夢の最終選択

黙雷師は、期待した二男・黙爾と三男・雷夢の二人を早くに失うという不幸に見舞われた。そのショックは計りがたいものであったろう。

しかし仏道修行で鍛えた黙雷師は、その苦難を乗り越えて布教と社会事業に身を挺したとされている。岩手・願教寺現住職興霖師の話で本稿を閉じたい。

「黙雷和上の後継者・大等和上直筆の本寺に残る資料によると『早逝した雷夢は最後にはキリスト教を改宗して仏教に帰依した』とあります。黙雷和上も浄土の世で夫人と共に安堵されていることでしょう」。

俗界に生きる小生（筆者）は思いを馳せる。西方浄土界で果たして親子再会が出来ただろうか。キリスト教と釈迦仏教の融合は出来るだろうか。いや、まず母八千代夫人に許しを請うて、それから父・黙雷に頭を下げるだろうなどと、想像は尽きない。

（終わり）

【とみなが・かずのぶ／山口市】

考古学はドラマだ。

■A5判／約600頁／上製本
■定価3,000円（+税）送料200円
■発行元
人吉中央出版社

砂時計
―思い出るままに⑩

小野武己

［Ⅳ］母のこと

⑤畑仕事…肥え汲み…

母は福島県の飯坂町の大きな商家の末娘として生まれ、長じて東京の女子美術大学の裁縫科を卒業した。結婚して何不自由ない生活をし、上海に渡り、さらにリッチな生活をして、休暇の度に訪ねてくる東北出身の学徒動員の特攻隊の兵隊さんに「上海のお母さん」と慕われていたという。敗戦後、学徒動員の兵隊さんは、三十名ほど居たのにほんの数名しか残っていなかったということを母から聞いた。

我が家も、引き揚げてからの生活は、どん底であった。飯坂町で産まれた一番下の弟を加えて、六人の子供を抱えて、まさに窮乏生活の極みであったようだ。引き揚げてすぐの相浦町、次に飯坂町、九電社長の叔父に呼ばれての博多での生活、そして長崎県の佐世保市の早岐町で、やっと生活の安定は得たものの、日々の暮らしは貧しく大変であったようだ。

芸は身を助けるとは、まさに母のことを言ったがようであった。母のお針の腕が、どれほど我が家の家計を助けたことか。母の仕立てた二千五百着の着物が子供たちの血となり肉となり、制服や教科書や学費に変身したのであった。

素人が農業をするのは、並大抵の事ではない。勿論、商売にするわけではない。背に腹は代えられずの、自給自足のための農業ではあったのだけれど…。

畑仕事をした期間が何年間であったかは記憶にないのだが、裁ち台の前に座ってお針仕事に勤しむ母の姿に加えて、お隣の森田さんから借りた畑で鍬を振るう、モンペ姿の母のイメージが僕の記憶の中にイン・プットされ、我が家の気難しい丁稚どんであった僕の仕事が増えたのであった。

そして、この畑から生みだされた野菜さんたちが、僕ら家族の胃袋をどれだけ満たしてくれたかは想像に難くない。

「ターちゃん、ちょっと手伝って頂戴…」

ある日、学校から帰って来た僕に、モンペ姿になった母が待ち兼ねたように声を掛けたのだった。実はこの日、学校の帰りがけにイサオくん達と野球の約束をしてきたのであった。だから、母のモンペ姿を見た途端、嫌な予感がして心塞いだのであった。

「皆んなと野球ばするごと、約束して来たっちゃけん、手伝われんちゃん」

何とか手伝いから逃れ、野球に行けるように弁解に努める。大好きな野球なしにはその日は暮れないのであった。

先輩になじられた母の縫ったホームスパンのグローブではなく、博多の叔父から貰った大事な革製のグローブとバットを小脇に抱え、身体の半分は既に玄関からはみ出していて、心は既に早岐グラウンドに飛んでいた。

「そがん言わんで、ちょっとだけ手伝ってよ。ターちゃん」

母も一所懸命だったのだろう。

「トウモロコシの出来たとよ。仕事の終わったら、もいできて、茹でて食べるとよかがね」

と、追い打ちをかける。

僕はこの一言で、コロッと心変わりしてしまった。

「よかたい、にきっと（ちょっと）だけばい」

宝物のグローブとバットを玄関の上がり框に、そっと置くと、母に付いて裏に廻った。

「畑まで、この桶を二人で担いで行くんよ」

母は何だかけったいな桶を指差しながら言った。たぶん、これもお隣の森田さんから借りてきたのだろう。

兎に角、僕は何だか知らないが、早くこの仕事を片付け、トウモロコシをかじりながら、野球に行くことに思いを馳せていたのだった。

母より少し背が高くなっていたし、畑まではゆるい上り坂になっていたから、僕が後棒だ。

よっこらしょ、と呼吸を合わせ、天秤棒の真ん中に桶を下げて担ぎ上げる。こいつはなかなかに難しい。桶の中の物が、チャプ・チャプと揺れ、今にもこぼれそうになる。

「お母さん、ちょっち、待ってよ」

畑への道のりの半分くらいの処に来て急に息がつまり、ハーハーしながら僕は声を掛ける。肩が痛い。桶の中が静まるのを待って、ふたたび、二人はそろり、そろりと坂道を上って行く。

「お母さん、何んか、妙な臭いのするばい…」

後棒の僕は叫んだ。何だか変だ。

「我慢してね。ね、もうちょっとで畑に着くから…」

母の息もやや上がってきているみたいだ。

「ウッ…」「オエッ…」

僕は胃の中の物がこみ上げそうになるのを必死に耐え、天秤棒が肩に食い込むのを我慢し、息を止め止め、腹にグイッと力を込めては一歩一歩と上って行ったのだった。だらだら坂を上り終え、我が家の畑を目前にした平坦な道に来た途端に、何故か桶の中のものがポチャンと跳ね返り半袖シャツの胸の辺りにかかったのだった。

「お母さん、何んか、かかったバイ、シャツに沁み込んできて、生温かい気がするっちゃけど…」

「お母さん、こいは何んね。俺いのシャツの黄色になってきたばい」

「変なか臭いのすっとやけど…」

僕は両手で天秤棒をしっかりと握ったまま、半袖シャツの胸の辺りを見て、ブツブツ訴えたのだった。

「そーっと、下ろして…、そーっとよ、ターちゃん」

母は畑の隅に埋め込んである大きなカメの前に来ると、そう言った。そしてウーンとばかりに両手を腰に当てて背伸びする。僕も真似をして、ウーンと背中を精一杯に伸ばすのだった。

母は桶のけったいな中身をカメの中にドボドボと流し込んだ。

折よくヒュルルーと心地良い風が頬を撫でていき、妙な臭いをも流してくれていったのだった。

そして、素人にしてはグリーンも鮮やかにたわわに生ったトウモロコシを、お母さんのモンペのポケットから取り出した風呂敷一杯にもいで、僕が担いでお母さんと手を繋いで山道を下ったのであった。

トウモロコシがもうすぐ茹で上がる。美味しそうな湯気が鼻をくすぐり、いやが上にも唾液が溢れて口の端からこぼれそうになり、慌てて手の甲で拭うのであった。

すっかり野球の事は忘れ去っていた。

茹で上がったトウモロコシをザルに入れて抱えてきた母はニコニコして子供たちに声を掛ける。

「さあ、できたよ。たんとお食べ」

「やったぁ」

子供たちは母を取り囲んで集まった。姉は奈良女子大学だ。高校生で受験勉強中の兄、もっそりとやって来て、「俺もご相伴にあずかろうかな」と座り込んだ。

お手伝いの後のおやつは格別だ。皆して心ゆくまで堪能し、お腹一杯になったのだった。

次の日曜日。

午前中は宿題。お昼過ぎて、僕は嬉々として、皆と約束した早岐グランドへと飛び出して行った。洗いざらしの半袖シャツに腕を通すのももどかしく、博多の叔父さんからのプレゼントの皮のグローブとバットを小脇に抱えて駆け足で向かった。

例によって、先輩のゴンさんから三振だ。相手ピッチャーの左利きのヤスオ君には二塁打を打たれてしまった。

最終回、やや陽も西に傾きかけてきた。権常寺の鐘が鳴るのも、もうすぐみたい。僕の打席、それまで散々ヤスオ君に抑えられてきたが、最後の一発。やったぁ、ホームランだ。

嬉々としてベースを一周して来た。その時にキャッチャーをしていた先輩のゴンさん、悔しそうに歯軋りしながら、ホームベースを踏んだ僕に近づいてきて、言った。

「おーい、お前のシャツの胸のところの、黄色になっとるばい」

シャツを指先でつまんで、厭味ったらしく鼻を近づけてクンクンと臭いを嗅ぐのだった。

【おの・たけみ／小児科医院院長、宮崎市大塚町】

生誕450年
記念
書き下ろし

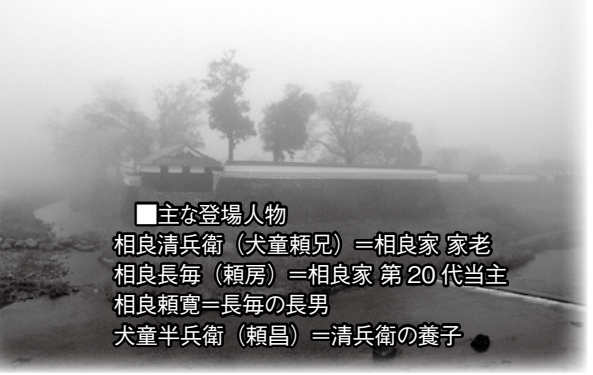
小説・相良清兵衛 ⑳

山口 啓二

【前回までのあらすじ】響野原の戦に敗れた相良勢は以後島津の支配となっていき、藩内の様々なことに影響を与えていった。球磨が二つに割れたり、『猫寺』の事件なども発生した。

相良清兵衛とその嫡男内蔵助の屋敷は、長毎公の住まいの御館からすぐ西の『お下屋敷』と呼ばれる場所のほぼ半分、球磨川と胸川河口にわたる広大な土地である。東西百三十間（二百四十米）、南北五十間（九十米）程もあった。その部屋数は何と大小八十室程。屋敷の北側を占める球磨川畔の石垣には専用の船着き場が二カ所あり、いずれも堅固な門が付けられ、特に上流側の船着き場の門はさらに頑丈な造りになっていた。お下屋敷の中央を貫く『後口馬場』に面する清兵衛屋敷の南側は東西一本の土塀に造り変えられ、その中央にこれもさらに堅固な屋敷門が堂々と設えてある。もともと屋敷には数か所の門があったのだが、キリスト教禁教令が一段と厳しくなった十五年程前、周りとは一線を隔てるかの如く、広大な屋敷へ出入りの出来る屋敷門を中央一つだけにしたのだった。お下屋敷のほぼ半分を占める清兵衛屋敷が、南の堅固な土塀と、北の球磨川縁の高い石垣で覆われた形であった。さらに嫡男内蔵助の屋敷内にある『地下沐浴場』上にある『易堂』の周りは、小石や割れた瓦を鋤き込んだ更に頑丈な土塀で囲われていた。そしてその沐浴場は『可以天』と呼ばれた。『かいて』とは「天を以って可し」。即ち、天にまします我らの父である神のおわすところだ。み心の天になる如く、地にもなさせたまえ、と言う事になる。

そののち、その易堂は存在を隠すため、貴重な陶器や置物や書物、武具などなどを保管する『藏』として使用されていった。



■主な登場人物
相良清兵衛（犬童頼兄）＝相良家 家老
相良長毎（頼房）＝相良家 第20代当主
相良頼寛＝長毎の長男
犬童半兵衛（頼昌）＝清兵衛の養子

翌寛永九（一六三二）年、関ヶ原の戦いの折り岐阜大垣城で徳川軍に寝返った際に首を獲った諸将の三十三回忌の年となった。長毎公は何年もの間この事を悩み、たびたび夢枕にまで出て苦しんでいたが、もしあの時に徳川に寝返っていなければ今相良家は存在しておらず、先祖が営々としてそれまで四百年以上も守り抜いた領地も残っていないであろうという事は十分承知していた。そこで寝返りを最初に進言した清兵衛に相談し、その時に討ち取った垣見家純はじめ五将と、西軍の大将で京都六条河原で処刑された石田三成公の法要をとり行う事とした。

「もうあれから三十二年もの月日が経ちまするか。時が経つのは早いものでござる。おかげでこれまで領土は安泰、今では領民も貧しいながらも平穏な暮らしを送ってございまする。殿のお考えごもっとも。では早速三十三回忌の供養塔を造らせ、法要をいとなむ事と致しましょうぞ」

「そうしてくれるか。で、場所は当家歴代墓地の北側では如何であろうのう」

「なんと、菩提寺の相良家累代の墓所にでございまするか。それは石田殿はじめ諸侯の方々のいい供養となりまする」

その年の五月、かつて朝鮮で共に戦った加藤清正公の世継ぎ忠広公が改易させられた。彼もまた密かにキリストを信じているらしく、それが幕府に見つかったのであろうか。小倉城主細川忠利公が隈本に入られ、その父上である細川忠興公がかつて『いく』殿の姉上『龍』殿が住んだ八代城を沿められた。

願成寺ではこの年の秋、命日にあたる九月十六日、石田三成公と合わせ六名の三十三回忌法要がしめやかにとり行われた。供養塔は相良家歴代の墓の左に予定通り設置された。五輪塔の地輪の右隅には、戒名ではなく石田冶部三成少輔と各々の名が刻まれていた。

寛永十（一六三三）年の夏、江戸桜田屋敷に幕府の人質

として住まわれていた『いく殿』は病に冒され、暮れになっても回復しなかった。寛永十一年の正月を過ぎるとさらに病状は悪化、遂にその二十八日に亡くなられた。六十三歳の人生であったのだが、彼女はキリスト教を信じ抜いたこと、そして相良家長毎に嫁いで人生を全う出来たので、とても安堵な死に顔であった。長毎公はちょうど参勤で在府中であり、ねんごろに夫人を弔われた。その後四十九日の法要も済ませ、数日後には人吉に向け出立なされた。戒名は『月山宗白』。キリスト教徒を表す『月』と『宗』の文字が入れられた。いく殿の墓も江戸桜田邸に立派な宝篋印塔を建てて弔った。代わりに人質となるのは次期相良家二十一当主頼寛公の妻で、清兵衛の実娘『亀鶴』である。

　ようやく領内も安定し平穏な日々が続くなか、清兵衛には今とても大きな悩み事があった。それは屋敷内に造らせた三つの地下礼拝堂を、このまま後(のち)の世まで幕府に隠し続けておく事が出来るか、ということであった。そこで長毎公とその世子頼寛公を訪ね、思い切って地下室の存在を打ち明ける事にした。内蔵助の屋敷内にある易堂下の礼拝堂は長毎公も頼寛殿もご承知の事であったが、他の二つは殿様にもまだ明かしてはいなかったのだった。

　翌寛永十二（一六三五）年の春、長毎公が江戸参勤から戻られてすぐ、清兵衛は公に面談を申し込んだ。愛妻いく殿を亡くされた長毎公はしばらく病気がちであったが、江戸から戻られた頃からは少しは元気になった。

「はて清兵衛、二人を呼び出し、さらには人払いをしての相談とは如何した」

「は、御承知の事かとは存じまするが、拙者はこれまで隠れに隠れて亡き奥方様と同じくキリスト教を信じて参りました。されど幕府の昨今の厳しい取り締まりにもはや誤魔化す自信がございませぬ。昨年の幕府の巡見の折には何とか隠し通して事なきを得ましたが、このままではあともう少しで完成します大手門南の石垣築城も中止せざるを得ませぬ。キリスト教信仰でかの高橋殿も加藤殿もお取り潰しに相成りました。実は、お二人にはまだ秘密にしておりましたが、奥方様がお参りされておられた易堂の下の『かいて』以外、我が敷地内の持仏堂の下二か所にも洗礼の場を拵えてございまする。いま、これをいかにして取り壊すかの思案をしておりまする」

「なんと清兵衛、この春死んだ『いく』もそなたの易堂下をたびたび訪ねて祈りを捧げておったゆえ知ってはいたが、まさかその他に二つもしつらえておったと申すか。それはまったく知らなんだ。さあて、如何したものか、のう頼寛」

「左様で。母上も亡くなり、もうあの地下は無用と思っておりましたが、あと二つもありましたか。流石は義父上、なにごとにも用意周到というべきか…」

　二人とも清兵衛の言葉に耳を疑うほどであった。

「さればでございまするが、拙者はいま球磨の岡麓に隠居所を造っており、完成のあかつきにはお暇を戴き隠居する所存にございまする」

「その件は既に承知しておるが、で、その地下室をいかに致すつもりじゃ」

「は、その折に屋敷ごと焼き払い一切を無き物にしようかと考えましたが何せ御城下、そこを燃やしてしまうと幕府や細川様のきつい検分が御座いましょうし、恐らく我が家は没しまする。それでは余りにも内蔵助や喜平次、それに半兵衛ら一族に申し訳が立ちませぬ。そこで如何でござりましょうや、岡麓に隠居したならば私めを即刻幕府に訴えてはもらえませぬか。いや、キリスト教を表に出せばこの相良家にも重大なるご迷惑をかけ、結果お取り潰しの沙汰が出るのは必至、それだけはいかにしても避けとうございまする。それゆえ、私めの悪行甚だしいとか、私腹を肥やしているとか、領民に無理難題を押し付けているとか、とにかく有ること無いこと洗いざらい幕府へ訴え出しては頂けませぬかと。もとより、自ら死を選べばことは治まるのでございましょうが、拙者みずから死することは我がキリストの教えにはござりませぬ。されば、次に参勤の折にでも是非御沙汰を賜りたく存じます」

「なんと、そちはそのような事を思案しておったのか。そういえば最近たびたびお主の姿が見えぬと奉行らが申しておったが、その時そこで礼拝をしておったのだな。表立っては言えぬが余もそちや『いく』と同じくキリスト様を信じておったので何とも言いようがないが」

「仰せの通りにござります。その前にわが妻『かよ』とも離別する覚悟でおります。神にいろいろとお尋ねをして

参りましたが、結果このようにするのが一番との考えに至りましてござりまする」

「そうであったか。そちはこの相良家を誰よりも一番に想い、幾度も幾度も相良家を、そして余を救ってくれた。それがこういう形をとる事になろうとはのう。うーむ、えらい難題じゃのう。すぐには答えが浮かばぬ。ここはしばし考えさせてくれぬか」

「何卒よろしくお頼み申し上げます。頼寛様、そういう事でございますれば、くれぐれもよしなに」

「御義父上、なんと申し上げてよいものやら。幼き頃から父上の如き存在でござったのだが」

「頼寛様、その折には娘『亀鶴』に暇を出して下さりませ。もし御家名に傷が付くような事になれば一大事にござりまする。あとの事は内蔵助と平兵衛に任せおきます故」

清兵衛の養子大童半兵衛頼昌は所領として人吉の南東二里ほどの、大畑村の近くの田代に広い土地を持ち『田代半兵衛』とも名乗っていた。元は蓑田甚兵衛の長男で、蓑田半兵衛の名もあった。

今夜は庚申講の行われる日で、昼過ぎに城下を出て夕方早くに田代の屋敷に着いていた。

「半兵衛どんお疲れでござりもした。もう今夜は庚申講じゃろか。ふた月はすぐに来ますなあ」

「さいばたい政七どん、いつもんごと皆に声かけをばしとってくだされ」

この地は昔から庚申信仰が盛んで、即ち六十日に一度来る庚申の日は朝まで寝ないでいれば、体内に潜んでいる三尸の虫が天の神様に宿主の悪行を報告できないという事で、地域住民が朝日が昇る頃まで御経をあげたり飲んだりしゃべったり、『ウンスンカルタ』やらこの地独特の『球磨拳』や『パラ拳』なるものをして朝まで寝ずに過ごした。この講はあちこちで行われており、相良領内にはこの種の『庚申塔』が七百以上も点在した。勿論庚申信仰は一部では『偽装工作』。その実、キリスト教の集会の『隠れ蓑』にもなっていた。この夜も大方四十人程の村人を屋敷に呼んで、簡単な食事の後、朝まで皆で祈りを捧げた。

（つづく）

【やまぐち・けいじ／人吉市】

藤原宏『外来語から学ぶ英単語』を読む

上村雄一（編集主幹）

異常とも思える英語の大量流入

いつのころからだろうか、人は国境に重きを置かずそれを超えて闊達に交流している。そもそも、根源的には、国境は人為の産物にすぎず、異邦の文化、言語・言葉の相互浸透は不可避の現象である。外国語は国境を軽く乗り越えて移動する。たとえば、文字としての日本語の源流は異邦の「漢字」にほかならない。漢字の一部は日本語化し、漢字の原意を保存しつつも、平仮名・片仮名を生み出してきた。日本文化は漢字なしに語れない。

維新も画期であった。文明開化すなわち欧米化の風潮のもとで、外国語が大量に「輸入」された。その大半は異邦語のカタカナ語化ではなく、日本語への翻訳という方法で摂取された。自由・平等・権利などがその例としてあげられる。それを肯定する意見も有力であるが、「翻訳」を通じて原義の切り捨てという弊害を生んだとの意見も強い。

第二大戦後、アメリカ英語（米語）の流入が顕著になった。政治経済上のアメリカの圧倒的力、日本とアメリカの特殊的関係がその背景にある。それにしても、最近のアメリカ英語の流入は度を越えているようにみえる。本書の著者・藤原はそれを「異常と思える」とする。

こうした状況をどう評価すべきか。藤原は、この問題に深く立ち入っていないが、「インフォームド・コンセント」のように翻訳不可能語を例示し、「翻訳」による対応ではなく、カタカナ語化したうえで、カタカナ語の元の言葉に戻り、さらに、その言葉（単語）の語源を訪ねる途を選んでいる。外国語の勉強法を伝授したいとの英語教師としての希望がそこに含まれているかもしれないが、それにとどまらない視野で本著をまとめている。

時事用語の基礎辞典

本書を一読すれば直ぐに分かるように、本書の主眼は「英単語」の単純な紹介ではない。新聞・雑誌に登場する外来語（大半は、アメリカ英語）の訳語の提示を目的にしているわけではない。藤原は、読者がそうした知識を概括的にしろ有していることを前提に、それを超えて、その語源にさかのぼることを読者に求めている。字面の暗記的知識では現代社会を乗り切れないと藤原はおそらくみている。

たとえば、「コンパ」。「パンを分け合う仲間」を意味するラテン語「コンパニア」に由来するが、藤原のその解説をみると、「合コン」と騒ぐ者たちの言葉の軽さが浮き彫りになってくる。言葉は生き物でその語の意味内容を変えていくが、それでも、私たちはその出身地は知っておくべきである。あるいは「ジェンダー」。ラテン語のゲヌスに由来し、後発的・文化に形成される性差別に関係し、その点で、生物学的性差にむすびつく「セックス」との意味的相違を本書は適確に指摘する。さらに、政府（環境省や経済産業省など）が喧伝する「３R」も同様。「３R」を拡大して「５R」・「７R」という用語を使用されるようになっているが、所詮は「３R」の変形にとどまり、「３R」の知識があれば、新たに「R」を追加しても、その願意はおのずから理解できる。「シェア」もそうである。販売の占有率を想起する人もいれば、ネット世界の用語として信じて疑わない人もいる。しかし、なにを原義とし、それがどのような経緯を辿ってきたかを知れば、この多義的言葉も身近になる。年配のみなさんのために、あえて蛇足するが、若者は「意見」を「共有する」意味で「シェア」を使うが、それは不自然な使用方法ではない。

約言する。カタカナ語は一見すると難しい。だが、語源にさかのぼっていくと、意味理解が飛躍的に進む。本書は、語学（アメリカ英語）の基礎辞典ではなく、それ以上にカタカナの時事用語に容易に接近する方法を記した基礎辞典であって、新語に戸惑わないための案内書である。収録語数は約６０００。索引があるともっと便利な辞典になったかもしれない。だが、索引作成は読者がするのがいい。その作業を通じて、読者は時事問題の知識を自然に身につける。

ライフワーク

著者藤原は１９３４年（昭和９）生まれ。本書出版時85歳。２００４年(平成16年)から5年にわたり「人吉新聞」に掲載したコラムを本書にまとめた。「恩師・故海老原亮吉先生の御霊に捧ぐ」との措辞がある。「海老原先生」とは、おそらく人吉高校で英語を担当し、のちに人吉二中の校長を務めた海老原先生であろう。海老原先生との出会いが藤原の英語人生を豊かにし決定づけた。その措辞（献辞）はその旨を明瞭に示す。本書には、「販売の意図はありません」の一文もある。なにごとかを生涯の仕事にすることができた人物の矜持をそこに感じる。

読者10名にプレゼント

この本を、藤原さんのご好意により追加で、読者10名にプレゼントいたします。巻末に表記の本誌編集部宛に、ハガキ・電話・ファックスでお申し込みください。（先着順）

外来語から学ぶ英単語（41）…… 藤原　宏

カー・キャリー・チャージ
car　carry　charge

「**car**（カー）、車」はケルト語起原となっていますが、印欧語根まで遡ると **kers**（走る）に辿りつきます。従って **car** の原義は走るものですが、ラテン語「**carrus**（カッルス）、二輪の荷馬車」を経て英語に借用されました。

ラテン語 **carrus** は荷馬車の意の他に、積荷そのものをも指しました。そこから「荷物を運ぶ」意で **carry**（キャリー）、「重荷を負わせる」意で **charge**（チャージ）へ派生しました。この２語は同根で二重語の間柄です。

carry は「運ぶ」の原義から「身につけている・伝える・進める・支える・感動させる・果たす・在庫がある」など多様な意味へ発展しました。「**carrier**（キャリア）、運ぶ人・もの」には保菌者の意もあります。名詞形は「**carriage**（キャリッジ）、乗り物・運び台・身のこなし・運搬・運営」です。

charge（チャージ）は「重荷を負わせる」の原義から「代金を請求する・つけにする・非難する・仕事を託す・容器に詰める・銃に装填する・充電する・突進する」、また名詞として「料金・負担・非難・突撃・責任」などの意で使われます。

"**Cash or charge?**" は「現金ですか、クレジットにしますか?」の意です。 **(408)**

倉敷便り ㉜

絵と文／原田 正史

倉敷市真備地区の現況

昨年夏、西日本を襲った豪雨（平成30年7月6日）による甚大な被害を受けた倉敷市真備地区に、被災一周年目を迎える前月の令和元年6月21日、復興の実際を見届けるために足を踏み入れました。

既述しているように、真備地区が水没被災した翌日の7月7日、私はその周辺を一巡し、さらに2ヶ月が経過した9月8日、再び真備地区に入りました。その時の中央低地の住居の被災は、水圧によるのだろうと思われ、玄関の戸がすべて無く、脱出に利用されたと思われる二階の窓はすべて開けられたままでした。新築間もないと思われる家屋の中には、補修工事が始まっているものもありましたが、殆どの家が無人であり、まさにゴーストタウンと言える有様でした。そのような状況の中で繁昌していたのが、コンビニと一店だけ開いていたスーパーマーケットに、ガソリンスタンドだったのです。お客さんは復興工事の作業員さんとのことでした。

今回も昨年9月8日と同じ道を忠実に辿り、前回の被災状況と現況を的確に比較できるようにしました。これによって、ごく一部に水没当時のまま放置されている家屋を除き、住宅はほぼ１００％、商店や公共施設は完全に復旧されていると思われました。

実は真備地区中心部では、市街地の中にかなり広い水田があちこちに残されていて、大変珍しい景観を形成しています。このことは通常の都市の形成過程とは異なり、ある時期を境に、水田地体が急激に市街地化された事を物語っています。当時の状況を良く知る人によると、昭和50年代に入って、倉敷市中心部から比較的遠距離の地にある真備地区を起点とし、倉敷市中心部から、海沿いに広がる工業地帯まで達する幹線道路が開通したのだそうです。これを機に今まで地価が高いために自分の家を持てなかった人たちが、安価な土地を求めて真備地区に殺到し、やがて建築ラッシュが始まり、またたく間に水田地帯が市街地に変貌した訳です。

2019年6月26日の朝日新聞より

もちろん、水田の上に札束が舞う土地ブームの最中にあっても、頑として先祖伝来の土地を守り続けた人もおられたので、水田が残され市街地が複雑に入り組んだ状態になったのです。水田所有者の中には代替わりも多かったろうと思われますが、すべての水田の田植えは完了しており、一枚たりとも放置されているものはありませんでした。この事は、代々受け継がれてきた土地を、あくまで守り通すという農家にとって最も重要な教えが絶えることなく脈々と伝わっている事を示しているのです。この様な考えの人たちが居る限り、真備の前途に光ありと言えるでしょう。

【はらだ・まさふみ／日本地質学会会員、倉敷市】

北御門 二郎・訳
トルストイ短編集
帝政ロシア時代の物語を
北御門二郎の「心訳」で贈る
現代人へのメッセージ

新たに編集された「カフカーズの捕虜」「神は真実を見そなわす」「舞踏会の後」「壷のアリョーシャ」「贋造クーポン」の5本を収録
レフ・トルストイ／作
北御門 二郎／訳
表紙絵／田口宏昭
北御門すすぐ・たえ子／編
■A5判／並製本／192頁
■定価 1,500円（+税）
送料100円
直販の申込は
〒868-0086 熊本県人吉市下原田町瓜生田675-3
TEL・FAX0966-22-7601 info@hitoyoshi.co.jp
人吉中央出版社

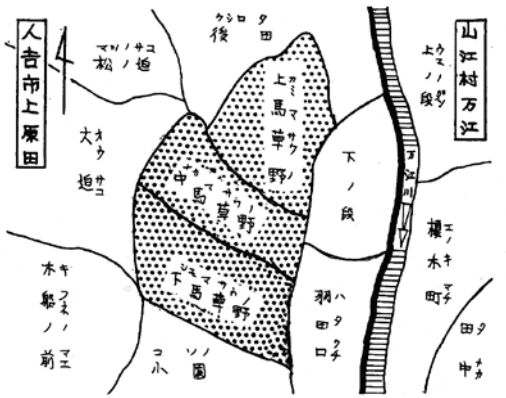
復刻掲載

字図で見る球磨の地名 ㉛

馬草野（マソウノ）

―人吉市上原田―

上村重次



前回は藪地名の解明手がかりを草ヤボに求めた。草刈り場は遠い昔から集落共同体の共有・入会地であった。その慣行から多くの草地名や茅（萱）地名が存在していると解釈する。では人吉市の馬草野の地名由来も入会地の馬草刈り場にちなむものであろうか。

人吉市旧原田村は現在、上原田町と下原田町に分かれ、馬草野は上・中・下の三小字になっていて上原田町の区域に入る。馬草野をマグサノと読めば馬草刈場で入会地ということが誰にでもわかる。ところが、願成寺文書〝真誉献灯立願文〟（天文十六年＝1547）によると、同寺十一世真誉は高寺・政小野・上野・逆巻・渡の各寺に献灯している。この政小野は馬草野にあった正持寺のことである（『九州相良の寺院資料』）。

問題は馬草野は中世には政小野と表記されていた点である。読み声は両者同じになるものの、政小野の意味は解釈しようがない。また馬草野と書けば秣（まぐさ）専用の草刈場のことになって、屋根用の茅草や肥料用の青草などは採れないことを意味する。このようなことは慣行としては考えられない。恐らく政小野、馬草野ともに当て字であろう。

『和名抄』の郡郷名に草を用字するのは十三例あるが、その中で能登国珠洲郡草見郷について考えてみる。『日本地理志料』は久佐見（クサミ）と訓み、天智帝七年（668）、越の国から燃土・燃水を献上したという『日本紀』の記事を根拠として「燃水は石脳油で臭水（クサミヅ）のこと。草見は臭水と同語」とする。

古代の地名説話で臭水由来地名としては豊前国仲津郡蓑見郷がある。『豊後風土記』に景行天皇が〝この水はくさい〟と仰せられたので、臭泉（クサミ）が球覃（クタミ）になり蓑見に変わった」とある。『古代地名語源辞典』（楠原佑介ほか著）は「くたみ（玖潭、来民、朽網）。各地に久田見、久田美の地名がある。クタ(朽)・ミ（場所を示す接尾語）で〝湿地〟を表す地名」という。

神話や地質表現は別に置くとして、蓑見がクタミに変わるのは草臥（くたびれ）の草と蓑が相通じるからであろう。またクタは朽でもあるからクタミ地名の表記が多様化したわけである。その原点はクサ(草)と言えよう。

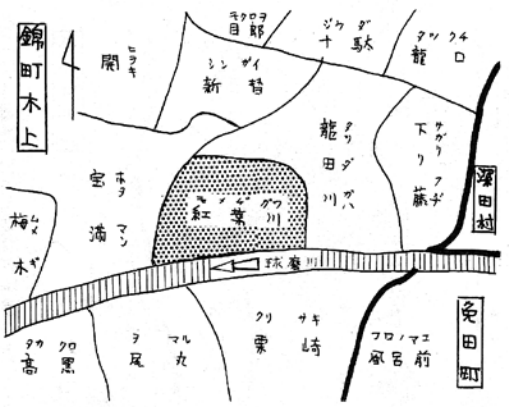
草地名は古代以来の全国分布である。また、草見、蓑見の〝見〟は国見山などの〝見〟と同じく境目の〝目〟のことである。見と目は同根の語である。人吉の馬草野を〝間草野〟に当て字してみると、馬の草刈場ということではなく、間地の草場、即ち境界入会地ということになる。人吉市木地屋町字真萱（マカヤ）も現状は大字界ではないものの、古い時代のムラ境のカヤ場（間萱場）と考えられる。

紅葉川（モメジカワ）

―錦町木上―

錦町木上字紅葉川は球磨川右岸べりの水田であり、東隣りは字龍田川（タツダガハ）である。この地名を見ながら思い起こされるのは平安時代の歌人で中朝三十六歌仙の一人にも選ばれている能因法師の次の歌である。

あらしふくみむろのやまのもみじばは
たつたの川のにしきなりけり



【おことわり】本連載は平成6年から9年にかけて執筆されたものの復刻版で、合併前の町村名をそのまま使用しています。

能因法師は摂津国三島郡磐手村古曾部の出身で永延二年（９８８）生まれ。本名は橘永愷（ながやす）であるが、肥後進士と号したこともあって、宇土郡不知火町小曾部が能因法師の出生地と伝承され、前記の歌を刻んだ歌碑も建っている。

錦町木上には能因法師の事跡や伝承はなく、紅葉川や龍田川という小字地名は能因法師の歌とは関係があるとは思えない。現地は球磨川のはんらん地帯だったらしい低地で、カエデなどの雑木が茂っていたことも考えられない。このような所にどうして紅葉川という地名がつけられたのだろう。

紅葉地名は数が少なく、熊本県内の字名では他に牛深市深海字楓ノ机（モミジノキ）があるだけで、『日本地名索引』でも五件しか見えない。類例が少ない地名の解釈は比較によって手がかりをつかむのは難しいので、語源追求から始めてみる。

紅葉の代表は楓で、漢音フウにカエデの和訓があるのは葉の形がカエルの手に似ているところから、カエルデと呼ばれたのがつづまったものとされる。別名鶏冠木（けいかんぼく）は葉の形色がトサカ（鶏冠）に似ているからという。またモミヂというのは染色の紅が揉（も）み出すのにちなむ語である（以上『大言海』）。

語源から得られたヒントとしては①楓（フウ）は朴（ホウ）に通じ、朴木（ホウノキ）という地名は傍木（ホウギ→境木）の当て字が多い②カエルはガマで構（境界の仕切）に通じることは（本誌第５号の）「墓石」で述べた③鶏冠のトサカは戸坂（境地）に通じる④モミヂは揉め地に通じ境界モメ（地名は論田が多い）も考えられる。紅葉川の訓がモメジガワとなっているのは揉め地の意を反映しているのかもしれない。

錦町の字図を見ると、紅葉川は深田村および免田町との境界に近い。龍田川という地名は立野（タテノ→標野）の〝立〟に関連するもので、この一帯が古くからのムラ境であったことがわかる。

紅葉の別の解釈としては、中世の謎言葉では、田は紅葉（籾地→モミを播く地）と表現された（『中世なぞなぞ集』）。しかし、紅葉川一帯の水田を謎言葉で紅葉（籾地）とする理由は思い当たらない。

【うえむら・しげじ／宇土市生まれ、元熊本日日新聞社記者】

俳句大学 Haiku University

Facebook 華文俳句社

永田満徳選評・洪郁芬訳

我們提倡使用「一個切」和「兩項對照組合」的二行俳句書寫

世界に二行書きによる〈切れ〉と〈取り合わせ〉を取り入れたHaikuを提案する

Kabun Haiku ❽

微塵
●
演奏長笛的少女
瑪格麗特
〔永田満徳評論〕
這是她的第一場演奏會。將熟人贈與的瑪格麗特花束放在舞台旁邊，小心慎重的演奏長笛。作者將清純少女的側影描繪得栩栩如生。

微塵
●
フルートを演奏する少女
マーガレット
〔永田満徳評〕
初のリサイタルの情景であろうか。お祝いに贈られた「マーガレット」の花束を傍らに置いて、緊張な面持ちで一心にフルートを演奏している「少女」の可憐さがきちんと捉えられている。

莊源鎮
●
博物館廊道的維納斯
夏雲
〔永田満徳評論〕
富有康健與美的維納斯像於建築物的室內；一簇簇聚集的夏雲於建築物的室外。兩項對照組合的情景對比，使夏日的一景有鮮明的描述。

莊源鎮
●
博物館の廊下のビーナス像
夏の雲
〔永田満徳評〕
健康的で美しい「ビーナス像」のある建物の内と、もくもくとせりあがっている「夏の雲」の見える建物の外との対比がいい。この取り合せによって、夏という季節をうまく切り取っている。

盧佳璟
●
玄關丟下的書包
暑假開始
〔永田満徳評論〕
學期的最後一天，孩子回家便將書包丟擲在玄關，一溜煙的跑去玩耍。這真是暑假剛開始的情景。我們可以感受到孩子迎接暑假的喜悅。

盧佳璟
●
玄関に放り投げたランドセル
夏休みの始まり
〔永田満徳評〕
終業式を終え、家に帰るなり、玄関にランドセルを放り投げて、遊びに駆け出していく、「夏休みの始まり」そのものの情景。「夏休み」を迎えた子供の喜びをよく表現している。

【ながた・みつのり／俳人協会会員、熊本市】

方言を味わう㊱

稲留三郎の世界⑮

―年中行事八月の巻―

前田一洋

八月朔日（ついたち）

「憑朔日（たのものついたち）」と名づけて、これを祝う。後深草院（第89代の後深草天皇）の建長年中（鎌倉時代の１２４９年ごろ）よりこの事あり。もと新穀を折敷（おしき）、あるいは土器に盛りてこれを送り「田の実」と称した。

田の実と「憑（たの）む」の和訓は同じ故に、人によりて憑と言うに義を取りて佳節（めでたい日）とす。

解説

明治維新よりも前に使われていた太陰太陽暦、いわゆる「旧暦」は、明治五（１８７２）年十二月三日を以て、明治六年一月一日の「新暦」に変更されました。これは明治政府による突然の改暦で国民は寝耳に水、その驚きと混迷は想像を絶するものでした。

公務員は、たったの三日間しか働かなかったというカドで、十二月分の月給とボーナスを全額カット。奥様と呼ばれた〝山の神〟の怒りはいかばかりであったことでしょう。

当時はまだ売り上げ金の支払いは盆と暮れが習慣になっていたために、商人は商品代をすっかり取り損なってしまいました。逆に貧乏人は借金取りから逃れるため、床の下や便所に隠れる必要はなくなったのでしょうが。

さらに丸損をしてしまったのが、暦の製作所でした。広い大きな板に日付や絵などを彫って、手刷りで印刷する木版印刷の時代でしたので、その手間ヒマのかかること夥（おびただ）しい。しかも用紙の代金だって半端じゃない。そうした苦心をして準備していた来年の暦、その全てがパーとなってしまったのですから。

そして表にこそ出なかったものの、大きな困惑を被ったのが、自然を相手に仕事をする農山漁村の人たちでした。農山村では、旧暦に合わせて農作業から年中行事までが組まれてきました。また潮の干満に大きく左右される漁村では現在でも旧暦が使われています。

このような次第で、公の行事は新暦でなされるようになりましたが、一般庶民の生活では旧暦の〝イキ〟は根強く、現在でも少し遠慮がちながらも、大半の暦には旧暦が印されています。また日常会話でも、「ゆんべは、いさぎぃお月さんの美しかったいどん。えーフル（古・旧暦）の十五日じゃったとな」。

こうしたことから、この稲留三郎の年中行事にも、新暦と旧暦が混同して用いられているようです。ここで取り扱った八月一日を意味する八朔も、新暦では八月下旬か九月上旬になりますので、旧暦としてご理解下さい。

ちなみに球磨・人吉地方では「八朔」の行事には、そう目立ったものはないようですが、ミナクチにカケグリやシトンギなどを供え、田の神様への感謝を捧げてきました。またナスビやキュウリなどで馬を作り、山に帰っていかれる田の神様の乗り物にしていました。

○

八月十五日

夜月を翫（もてあそ）ぶに、冬は繁霜大寒。夏は蒸雲大熱、雲月を蔽（おお）う。霜人を侵（おか）す。蔽うと侵す共に翫ぶに害あり。秋の時における夏に遅れ、冬に先立つ八月の秋における季の始め、孟の終わりなり。ほか略す。

解説

八月十五日いわゆる「中秋の明月」ですね。寒からず暑からず、そうした十五夜の満月こそ眺める人の心を満たしてくれる。

このくだりも、旧暦に基づいた記述のようで。ちなみに今年、令和元年の「八朔」は八月三十日となっています。宇土半島南側にある「永尾神社（えいのお）」あたりからは不知火（しらぬひ）を眺めることができます。また矢部や高森などの大きな「造り物」も、ナスビの馬の延長ではないでしょうか。奇しくもこの日は二百十日にも近く台風接近も。

八月の年中行事では、球磨弁での記述はなくて、いささかコト難しい文章ですが、次の九月号では、「おくんち祭り」のくだりで、存分に堪能頂けることと思います。ダレやみを頂きながら、猛暑を乗り切ってください。

【まえだ・かずひろ／人吉市】

お休みどころ通信⑨

新潟の精神神経学会に参加する

精神科医　興野康也

会場である「朱鷺メッセ」のビル。高いので街のあちこちから見える

精神科の最大の学会が日本精神神経学会です。この学会が専門医を認定してきたこともあり、専門医資格更新の単位取得には学会参加が必要（に近く）なっています。吉田病院でもドクターが順番に交代で出かけるのですが、今年は僕が行けることになりました。

大阪経由で飛行機は新潟に順調に着きました。どんよりとした曇り空で、シトシト雨が降っています。日本海側の冬にはどんよりとした天気が多いと聞いたことがあります。空港バスで市内に向かったのですが、道幅が広く、ガランとした雰囲気があります。ドイツ映画に描かれていた冬の港町を思い出しました。木々の様子を見ても、九州よりもずいぶん寒そうです。緯度が違うので気候が違って当たり前なのですが、異国に来たような感じがしました。

新潟駅前のビジネスホテルから、まずは会場である「朱鷺メッセ」まで歩いてみることにしました。裏道を通ったせいもありますが、シャッター街が目立ちました。もともとは駅前の商店街が中心地だったのでしょうが、おそらく郊外の大規模店舗にお客さんが移っていったのでしょう。新潟に限りませんが、以前の中心地の再活用が求められています。

30分ほどで朱鷺メッセにたどり着きました。学会は明日からなので「新潟市水族館 マリンピア日本海」に行きました。ここで子どもたちのおみやげを買うように頼まれていたのです。マリンピア日本海は地元の海や川の魚の展示と、世界の魚の展示の両方をしようとする意図であり、学術的な内容になっていました。いちばん印象的だったのは地域の海の展示で、海藻や岩の様子や魚の種類が鹿児島とはずいぶん違うんだなと思いました。信濃川と阿賀野川という大きな2つの川の河口にあたり、川と海のつなぎ目であるのが新潟市の地理的な特徴のようです。

時間があったので、水族館でポスターを目にし「新潟県立万代島美術館」にも行ってみました。現代美術の展覧会「コレナニ?!びじゅつ　アートいろいろ 見かたイロイロ」でした。現代美術でも古典芸術と変わらず、この世界や生きている経験そのものを、既成概念を取り払った形で提示しようとしていると感じました。僕がいいなと思ったのは「山水―くずる2」（伊藤彬）という作品でしたが、描かれているすすきの野原は不気味です。生きていることと死んでいること、気持ちよさと不快さ、健康なことと腐敗することといった両極のどちらでもない姿が描かれています。ふだんは生きていることをあまり意識しませんが、例えば他の生き物を食べないと人が生きられないことを取っても、かなり不気味なことなのでしょう。

「新潟市水族館 マリンピア日本海」の内部。日本海の岩場の特徴や海の様子も展示されている

新潟市美術館。「インポッシブル・アーキテクチャー」という企画展が開催されていた

3日間の学会の内容は多岐にわたりますがスペースの関係で、おもな項目だけを紹介します。

●シンポジウム「認知症とてんかんにおける記憶障害を探る」（司会：渡辺雅子、田中晋）

●シンポジウム「精神・発達障害者の就労支援に関わる精神科医（主治医・産業医）の必須アイテム」（司会：神山昭男、奥山真司）

●ワークショップ「脳波の基礎コース」（司会：山内俊雄、矢部博興）

「どんなときに脳波検査を考えるか」（山内俊雄）

●シンポジウム「認知症とてんかんにおける記憶障害を探る」（司会：渡辺雅子、田中晋）

●シンポジウム「てんかんと精神医療の新たな連携の形」（司会：山田了士、和田健）

●シンポジウム「精神・発達障害者の就労支援に関わる精神科医（主治医・産業医）の必須アイテム」（司会：神山昭男、奥山真司）

●ワークショップ「脳波の基礎コース」（司会：山内俊雄、矢部博興）

◎「どんなときに脳波検査を考えるか」（山内俊雄）
◎「臨床脳波の基礎知識」（矢部博興）
●シンポジウム「昨今の産業衛生のトピックスとメンタルヘルス的視点」（司会：工藤喬、渡辺洋一郎）など。

【おきの・やすなり／人吉市】

※筆者のブログ「お休みどころ　こころの相談活動を作り続ける」では、この学会に関する聞き取りノートが閲覧可能です。興味のある方はご覧ください。

くまがわ春秋歌壇

いもご短歌会

加害者が被害者気取る我が日本　植民地支配なきがごとくに
この一年四たびもNOを突きつけし　それでも止まらぬ美ら海殺し
柳原　三男

茜さす飛行機雲はどこまでも白き雲間に白き月あり
雨上がり川霧昇る川辺川　水の妖精住めるがごとし
坂本　ケイ

半月のショートステイより帰りたればひ孫またまた太くなりおり
癌宣告受けたる夫うそぶきぬ「反戦平和が我が活力」と
上田　廸子

散歩車を一歳児らが手綱引く〇歳児乗せ山車のごとくに
園庭に保護者とつくりし　どろんこ山「洗えばよかけん遊んでおいで」
宮川しのぶ

ハンセン病の控訴断念の記事躍る選挙がらみと友は冷ややか
「トランプのポチ」と世界に知れ渡る独立国の首相ぞ汝（なれ）は
上田　精一

前号【くまがわ学習塾㉛の答え】

問１　次の花の「花言葉」を書け（例：ツクシイバラ＝素朴な愛）
① 梅　「不屈の精神」、「高潔」　★赤梅（優美）　白梅（気品））
② 桜　「精神美」、「優美な女性」、「純潔」
③ ツツジ　「節度」、「慎み」　★赤ツツジ（恋の喜び）、白ツツジ（初恋）
④ 山桜　「純潔」、「高尚」、「淡白」、「美麗」
⑤ リュウキンカ　「富」、「幸福」、「贅沢」

問２　「縁」を使った熟語を書け（例：縁談）
①（　無縁　）
②（　離縁　）
③（　縁側　）
④（　縁組　）
⑤（　縁日　）

問３　鮎料理の名前を書け（例：塩焼き）
①（　刺身　）
②（　せごし　）
③（　唐揚げ　）
④（　甘露煮　）
⑤（　一夜干し　）

問４　次の文書は正しいか誤りか。正しいときには〇を、誤っているときには×をつけよ　（例：参議院議員の被選挙権は 30 歳からである。〇）
① 参議院議員の任期は 6 年である（〇　憲法 46 条）
②「三権の長」は、総理大臣、最高裁長官、衆議院議長の三職をいう
（×　参議院議長も三権の長　）
③ 衆議院選挙と参議院選挙が、同時に、実施されているときには（衆参同時選挙）、国会は存在しないことになる
（×　参議院選挙は議員半数入れ替え選挙。憲法 46 条、同 54 条 2 項）
④ 参議院の英語表記は、‘Upper House’ である（〇）
⑤ 参議院は、アメリカの上院を参考にして、創設された
（×　アメリカの上院は州代表制　）

問５　熊本県内にある城跡をあげよ（例：麦島城跡）
①（　水俣城　）
②（　佐敷城　）
③（　古麓城　）
④（　上土城　）
⑤（　宇土城　）

坂本工場関係資料 ⑦ 戦争と工場

出征軍人の送別会（坂本駅）

勤労奉仕
（現・秀岳館高校の生徒たち）

出征軍人の送別演劇会

GHQ の視察

産業報国会の集会

鶺鴒（せきれい）短歌会　七月詠草

アカペラで蛙の歌ふ大合唱夜のみず田はにぎやかに更く
山郷の谷間を照らす満月に棚田の水に百の月映え
守永　和久

水張り田に十三夜月照り映えて鷺のあゆみの揺れて光りぬ
皐月晴れ小川の石に河鹿群れラブコールの声せせらぎに和し
河内　徹夫

代田には大きく裂けし干割れあり農夫は腕組み畦に佇む
青空に白き花咲く娑羅（しゃら）の木は半世紀経て大樹となりぬ
中村美喜子

今年の免許更新最後やも認知に絡む八十路の不安
飛鳥川銀輪飛ばし行くうちに『首塚』出逢い驚愕したり
西　武喜

六月の夕陽ゆっくり落ちていくあいさつかわし散歩楽しむ
若き日にボートで遊びし球磨川は五輪をめざすカヌーの聖地に
釜田　操

広報で「レベル４」と云われても高齢者には避難むずかし
草むしり大地の草のその強さ精根つきて足腰痛む
三原　光代

初めての入院生活感謝しつ早く退院できるか不安
八十の声を聞いたら入院に周りの労わり心に沁みる
中原　康子

花筏落ち花集め流れ来る咲く花よりも多くの花が
幼きに足中履いて梅雨の道友と駆けっこシャブチを浴びて
橋詰　了一

残されし妻の日記に書かれたる吾との出逢い幾度も読みぬ
好きだった「さくら貝の歌」流れれば妻と歌った良き日が甦（かえ）る
堀田　英雄

マイ・文庫本

澤宮優『戦国廃城紀行』

単行本　2010年1月　河出書房新社

2019年6月20日（河出文庫）

小西行長の宇土城調査が作者の出発点であった。そこから「関ヶ原」で敗北した武将たちの「廃城」の追跡が作者の課題になっていく。「勝者の居城」ではなく、「敗者」の「廃城」を作者に調べあげていく。「弱き者、目立たぬ者、影にあるものに目を注ぐ」という作家・澤宮の立場をそこにみることも可能であろう。歴史を正確にたどり、勝者に歪められてきた歴史を構築しなおしたいとの彼の使命感に共鳴する人も多いにちがいない。

関ヶ原

「関ヶ原」に注目したこともあって、本書は織田信長・豊臣秀吉・徳川家康を中心に据えながら叙述をすすめている。永禄11年（1568年）の「観音寺城」、元亀4年（1574年）の「小谷城」、天正5年（1577年）の「多聞城」への信長の攻撃、それぞれの城の特徴と六角、浅井、松永の滅亡の歴史が語れていて、一見すると、天正10年（1582年）の本能寺の変・秀吉の坂本城攻撃にいたる平凡な「戦国史観」にすぎないのではないかの疑問もでてくる。その頃、九州では、嶋津の北上にともない相良の八代支配が終焉をむかえ、響野原で義陽が戦死した。

本能寺の変から5年後の天正15年（1587年）、秀吉は八代におもむき、嶋津は秀吉に服することになるが、本書は、そのことに立ち入ってはいない。本書を読むと、秀吉が光秀を討った時点で秀吉の時代に入った錯覚に陥る読者も多いだろうが、「勝利」しつづけたのちの「カタルシス」としての「関ヶ原」である。その「敗者」の「悲哀」には他の多数の敗者の無念が宿っている。作者もそのことを十分に承知しているだろう。

本書は、戦国末期の人物論ではない。それを踏まえたうえでの「廃城」論である。「廃城」を語ることを通じて城郭の歴史論にもなっている。行長が寺院を焼いたとの伝承は勝者側がでっちあげたフェーク（虚偽の事実の伝播）ではないか、それは「勝者の歴史」観ではないか、「勝者の歴史」は訂正されなければならないとする課題意識も鮮明である。勝者には必ず「正義」があるわけではなく、むしろ敗者にそれがあった場合も多い。行長を通じて、高山右近などのキリスタン大名、それと関係して島原の乱の世界に読者を誘う。本書を読み、フロイス『日本の歴史』を再読したい気分になる人は多いにちがいない。

歴女

作者・澤宮は八代郡鏡町（現・八代市）出身。昭和39年生まれ。小西行長の宇土城、麦島城、加藤清正の鷹ノ原城に多くの頁をさいている。本書を手にそれらの廃城にむかえば、作者の意図はさらに鮮明になるだろう。

「文庫版あとがき」に「石田三成や大谷吉継など、関ヶ原の西軍敗者の武将に光を当て、彼らの名誉回復の大きな力になったのは『歴女』と呼ばれる歴史の好きな女性たちだった」の一文がある。「歴女」は承知しているし、彼女たちの力量は日頃から感じているが、明確な言葉で彼女たちが果たしてきた活動を強調することはなかった。本書を読んでの最大の収穫はこの一文かもしれない。

放浪の詩人高木護の仕事遍歴をもとに昭和の仕事を紹介した『昭和の仕事』（弦書房　2010年）、戦後の経済成長を支えた「金の卵」に焦点をあてた『集団就職』（弦書房　2017年）など、彼のどの作品にも味がある。本書を補足する作品として『廃城となった戦国名城』（河出書房新社　2010年）がある。

（春秋）

情報ピックアップ

プラモデル作ろう コンテスト作品募集

あさぎり町の「おどんがプラモコンテスト」実行委員会は今年もプラモデルコンテストの作品を募集している。

同コンテストは、夏休み期間中の8月18日から25日まで展示し、観覧者の投票で入賞者を決めるもの。中学生以下のジュニア、高校生、一般の3クラスがあり、各クラスの上位3位までを表彰する。

作品は市販されているプラモデルキットを組み立てたもので、未発表のものに限る。一人で複数出品できるが、不安定なものは安定して展示できるように工夫すること。

作品受付は、あさぎり町免田のポッポー館で、8月17日午前9時から午後5時まで。受付後に同館内展示スペースに飾る。出品手数料は不要。

問い合わせは、実行委員会事務局の蓑毛勝輝さん（☎090・3738・9487）へ。

9月に人吉市で作品展
人吉球磨美術連盟

人吉・球磨地域における美術（絵画）の愛好家が気軽に作品を発表し、広く交流することを目的とした「人吉球磨美術連盟」（宮村宏代表）の作品展が9月14日から17日まで、人吉市の人吉スポーツパレスで開催される。

ひろしの… げっかん・ぎひょう

―米・英とイラン　緊張深まる。平和外交を―

アメリカは“有志連合”に日本の参加を呼びかけている。実際、自衛隊が海外で武力行使を行えば、憲法違反となるのでは、と心配する声が広まっている。

インフォメーション

開催中

▽夏季特別展「なるほど！紙づくりの世界～手漉きと機械製紙～」（～8月25日、八代市立博物館未来の森ミュージアム）

8月12日（月）

▽人吉市九日町「夏ぁびす」・「球磨焼酎100円フェス」（同町札の辻交差点周辺）

8月15日（木）

▽第65回人吉花火大会（中川原公園周辺）

8月18日（日）

▽夏休みおどんがプラモコンテスト作品展（～25日、あさぎり町免田ポッポー館）

8月22日（木）

▽第3回ツクシイバラ絵手紙コンテスト作品展（～9月19日、イオン錦店通路）

8月24日（土）

▽第73回犬童球渓顕彰音楽祭個人コンクール予選（～25日、人吉市カルチャーパレス）

8月30日（金）

▽第13回球磨川音楽祭with木野雅之（人吉市カルチャーパレス）

8月31日（土）

▽第13回球磨川音楽祭with木野雅之（多良木町・交流館石倉）

▽第28回日本一の大鮎釣り選手権大会（球磨村一帯）

9月1日（日）

▽第23回清流・川辺川現地調査シンポジウム（人吉市東西コミセン）

※天候の影響などにより中止・延期になる場合があります。

TAKEDA Eye Clinic
たけだ眼科クリニック
院　長 竹田 憲司
人吉市南泉田町39　☎23-3096
めがね・コンタクトレンズの
アイ ウェア槇（まき）
（たけだ眼科ビル内）☎0966-23-3097
デイサービスセンター
ケアプラン作成所いずみ
（居宅介護支援事業所）
いずみ
協力医療機関 たけだ眼科クリニック
人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307

編集後記

今月号の森山学さんの「建築みてある記㊱（28頁）」に取り上げられている「道の駅坂本」で、「モモコの1日駅長」なるイベントがあると聞き、㋮さんと出かけた。地元の人たちの手作り感満載のイベントで、目と舌で楽しんだ（4頁）。★8月は故人を偲ぶ月、尾方保之さんの「『戦地（種子島）の便り』に見る家族の絆（36頁）」など戦争体験を聞く機会も多い。74頁にある「坂本工場関係資料⑦戦争と工場」と合わせて一読いただきたい。★表紙写真の人吉市矢岳町に出来た旧国鉄駅長官舎を改修したホテル「星岳・月岳」は、歴史を感じさせる建物と地元の魅力たっぷりのサービスが用意されているという。しかしJR九州が公表した2018年度の利用状況では、全体の4割の区間が「維持困難」区間という気になる数字になっており、人吉―吉松間もその一つだという。このホテルの取り組みがその一助になることを祈りたい。★猛暑のなかではあるがお盆も近い、この世に生をいただいた恩に感謝しながら、暑い夏を乗り切りたいものだ。（ま）

〒868―0015
熊本県人吉市下城本町1436―4の3号
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部
info@hitoyoshi.co.jp
電話・ファックス 0966・23・3759

本誌の取扱店舗
■清藤書店■ブックスミスミ■明屋書店（錦店・免田店・多良木駅店）
■道の駅さかもと■ TSUTAYA 八代松江店

匠の技
御膳醤油（だし入り万能しょうゆ）
・玉子かけご飯
・豆腐
・お刺身に
300ml 650円（税抜）
◆納豆みそ（お徳用）300円（税抜）
◆みそ煎餅 477円（税抜）
◆納豆みそ 477円（税抜）
人吉散策コース 九州自然 蔵めぐり
みそ・しょうゆ蔵
資会社 釜田醸造所
マルカマ
会長 釜田元嘉
社長 釜田顕
〒868-0001 熊本県人吉市鍛冶屋町16
電話（0966）22−3164
FAX（0966）22−3165
メール info@marukama.co.jp